

---

# FRAUD CALM -tail-

早村友裕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F R A U D   C A L M   -   t a i l -

### 【Nコード】

N 4 1 9 9 D

### 【作者名】

早村友裕

### 【あらすじ】

1年前に終結した戦争を理由にして折り合いの悪かった親類のもとから逃げるように立ち去り、小さな街の片隅で酒場を営むようになった。穏やかな暮らしの中に入り込んでくる違和感。曖昧な記憶が呼ぶ名前。すべてを思い出した時、新たな冒険の扉が開く

今日から新しい生活が始まる。

まだ慣れないベッドから起き上がり、部屋のカーテンを開けると外は冬の様相を呈していた。新生活を始めるのは通説的に春なのだが、まあそこは大した問題ではない。

ディアブル大陸内陸部グライアル平原の北部に位置するこの街は冬になると雪がそれなりに積もる。生活に支障が出るほどではないが寒いことに変わりはない。リビングの端にある小さな暖炉に火を入れた。

ついでにその火で湯を沸かし朝食の準備に取り掛かった。

1年前に終決した戦争はあちこちに爪痕を残した。

ずっとグリモワール王都ユダの城下で暮らしていたのだが、隣国セフィロト軍の侵攻にあい单身この小さな街の片隅に引っ越してきた。家族はない。女手一つで育ててくれた母を幼いころに亡くし、引き取られた親類の家では折り合いが悪かった。

戦争前後の記憶はとても曖昧だ。

ずっと王都の親類の家にはいた気もするのだが、それにしては自分の体には明らかに戦闘痕と思われる傷跡が多すぎる。徴兵されて戦場に行っていた時期もあるのかもしれない。

気がつけば戦争を理由にして親類から遠ざかるように王都から立ち去っていた。

この小屋は以前の持ち主が引っ越すというので譲ってもらった。確かその持ち主とは街の片隅の酒場で出会っただけの関係だったからもう二度と会うこともないと思う。

譲り受けた小屋は一人で住むには十分の大きさだった。入ったところキッチンを併設したりリビングがあり、奥には書斎と寝室がひとつずつ。表には畑もあったが手入れする気は毛頭ない。裏に小さ

な井戸が付いており、水で困る心配もなさそうだった。

所持金は多かった。働かずともゆうに1年は生活できるだろうが、早急に職を持つと思った。

戦争が終わってからそれほどたっていないまだまだ不安定な情勢の中では安定した収入があったほうがいいだろう。

この穏やかな生活が愛おしかった。

たくさん傷を全身に負っている自分は命のやり取りを日常的に行っていたんだろう。左肩にはひきつるような傷跡が、また腹や腕には縫合跡がいくつも見られ、とくに左胸の上には鋭利な刃物で貫かれたような跡が残っていた。他にも腕も足も裂傷や火傷の治った痕多い。

全身、ひどい傷だ。とても人に見せられたものではない。だからこそこの新しい生活を楽しみたかった。

たとえこれがつかの間の休息だとしても

ちょうど冬が終わり春を迎える頃には就職口が見つかった。

少し歩いたところにある街の飲み屋街、その一角にたたずむ小さな酒場の店主だった。

酒場の上の階にある宿屋を営むステラ「クラソン」という若い女性に突然街中で声をかけられ、いつの間にか酒場を切り盛りする契約を交わしていた。

もともと料理は得意だし、酒の類に関する知識もそれなりにあった。だから売り上げの一部を場所代として上納する代わりに自分は店を手に入れたのだった。

ステラは最初から変な女だった。

初対面でも道すがら突然呼び止めた後、じろじろと自分を上から

下まで見た。そしてそのセピア色の瞳をきゅっと吊り上げるように笑って人差し指を突きつけてこう言ったのだ。あなたに決めた！  
今となつては運がいいと思えるが、当時はあまりの唐突さと強引さに一歩退いていた。

「私の目に狂いはないわ。あなたならきつと店を盛り返してくれるわ！」

ステラは明るい金髪にセピアの瞳をもつ美女だった。もっとも自分は女性に関して無頓着だからそれは特筆すべき点ではない。

むしろ非常に気の強い女だということを記すべきだろう。それもなぜか俺のことを所有物と勘違いしている節がある。暗に男女の関係を迫られたことも一度や二度ではない。今までは何とか逃げてきたが今後どうなるかはわからない。

自分はそれなりの容姿に恵まれている。背は高いほうだしそれなりに鍛えてあるから太つてはいない。女性たちが端正だと絶賛する顔立ちと切れ長の眼におさまる紫の瞳、艶やかな黒髪は人目を引くには十分だった。また、傷を隠すためいつも襟まできっちりある黒ずくめの服を着ていたからいやでも街中で目立っていたようだ。

回転するや予想以上の売り上げをたたき出したことに対してステラはご満悦のようだった。

それでも小さな街の片隅で女性たちを相手に店をまわすこの生活はそれなりに楽しんでいたし、夕方ごろから朝まで働いて昼間睡眠をとるという暮らしに慣れ始めていた。

ほんの1年前、この土地を支配していたのは魔界に住む悪魔たちを崇拜する『グリモワール王国』だった。

大陸西岸の豊かな平野と内陸部の高原、南の沿岸部と北の山地にわたる広大な国土を有する巨大な国家は、黒有翼獅子を紋章に掲げ、ダイク・グリフィン

『レメゲトン』と呼ばれる天文学者を抱えていた。

『レメゲトン』は魔界の悪魔を召還し、その人知を超えた力を使役する天文学者のことだ。王国創立当時は72の悪魔をそれぞれ使役する72の天文学者たちがいたのだが、数百年の時が流れ、『レメゲトン』の名を頂く天文学者はわずか数名にまで減少していた。

その隣には天使を崇拝する国、セフィロトが在った。純白の羽根の乙女を紋章に戴く光の王国には、天使を召還する10人の神官『セフィラ』がいた。

『セフィラ』は天使の力でもって、グリモワール国の『レメゲトン』に対抗した。

もともと天使と悪魔という相対するものを崇拝していた両国の関係は長い間緊張状態にあった。

そして2年前にとうとうその均衡は崩れ、戦争が勃発した。

ほんの2年にも満たない短い期間の、しかし非常に激しく凄惨なその戦闘でグリモワール王国は『レメゲトン』をはじめとしたほとんどの戦力を失い、降伏を決めた。

現在この大地の指揮権を持つのは天界の天使たちを崇拝するセフィロト国である。

これは、平和なある街の片隅から始まるお話。

世界の理を巻き込むことになる壮大な物語の『序章』でしかない

このお話は動き出す時を待って静かに、静かに眠っていた。

## SECT・1 グレイシャー・グリフィス

開店してから一か月、あまりに忙しいのでバイトを雇うことにした。小さな店とはいえ満席になると自分ひとりで注文から調理までを賄うのは不可能だった。

募集の張り紙でもしうか。

そう思っただけで開店前の夕刻にペンを片手に紙に向かってしていると、いつの間にか後ろからステラが覗き込んでいた。

顔が違い。ウェーブのかかった明るい金髪がかすかに触れてかゆい。

「なあに？ バイト募集？」

「ああ。さすがに一人では手が回らないからな」

「待ちなさいよ、ウォルジェンガ。あなた無節操にそんな募集張り出す気？」

ステラが呆れたように言った。

何か問題があるだろうか？首をかしげると、彼女ははあ、と大きなため息をついて腰に手を当て、反対の手で人差し指を俺の鼻先に突きつけた。

「そんなことしてみなさい、あなたとお近づきになろうと思ってる女性が街中から殺到するでしょうね！」

「……そうか？」

「そうよ！ もう少し自覚なさい！」

「だったらどうしろと言っんだ」

目の前に迫った指が不快だったので手で払いのけた。するとステラもさすがにむっとしたような表情をする。

が、すぐにまたセピアの瞳を近付ける。腕に胸が当たっているのもわざとだろう。

逃げたかったがかるうじて堪えた。

「私に任せなさい。すぐに捕まえてくるから」



捕まえる？

とてもバイトを雇う時に使う言葉とは思えなかったが、彼女のこ  
とだ、また街で歩いている人間をその辺でスカウトしてくるつもり  
なんだろう　自分をそうやってこの酒場の店主に置いたように。

ステラは言葉通り、次の日には年のころ二十歳前後の青年を捕ま  
えてきた。有言実行とはよく言ったものだ。

また見目麗しさに選んできたんだろう、どこか犬を思わせる大き  
な目が年上の女性受けしそうな屈託のない笑みを見せた。そうする  
と八重歯がのぞいて幼く見える。背はそんなに低くないのだが童顔  
で人好きしそうな雰囲気をもった青年だった。

「リディアルド・ピースです。よろしくお願いします」

はきはきとした口調は好感を持てた。表情をよく映す大きな栗色  
の瞳は少し緊張しているようだった。

「リッド君よ。ここから少し北にある農場の次男坊ですつと家業を  
手伝っていたのだけれど、お兄さんが結婚して仕事が減ってしまっ  
たんですつて。だからここで働いてもらうことにするわ」

ステラはにこりと笑った。

よくこんなうまく見つけてきたものだ。感心するしかない。

「俺は店長のウォルジェンガ・ロータス。早速だが、今晚から働け  
るか？」

「はい！」

満面の笑みを見せたリッドという青年は、大きく頷いた。

リッドが働くようになって、さらに客が増えた　まあ、予想は  
していたのだが。開店から閉店まで休みなく働く毎日。常連も増え、  
客同士でも様々交流があるようだ。

何度か女性客同士がつかみ合いの喧嘩になったこともあった。  
その原因が、ある女性客がリッドに触ったの何だのという理由な

のだからもうどうしようもない。これからもこんな理由で乱闘が起きるかもしれない。リッド本人のためにもいろいろ対策を講じるべきだろう。

それ以外はさしたる問題もなく毎日を送っていた。

その日もいつものように明け方家に着き、カーテンを閉め切って眠りについていた。夕刻の準備まで起きないつもりだった。

ところが、突然ノックが聞こえた。

不覚にも偶然目を覚ましてしまう。普段なら扉を閉め切った寝室にいればノックの音で目覚めることなどないのに。

仕方がない。

簡単に服を着て入口へ向かう。

「どちら様ですか？」

そして、扉を開けた。

その向こうに立っていたのは二人の女性だった。

「初めまして、向こうに引っ越してきたダイアナ＝フォーレスと言います。ご挨拶に伺ったのですが」

年上と思われる一方の女性が微笑んだ。

ステラなど歯牙にもかからない、極上の美人だ。それも冷たさを欠片も感じない温かい柔らかな空気を纏ったやさしい微笑みを持つ。自分と同じ色の瞳は紫水晶アメジストのようだし、肌は絹のようだ。軽く波打ったこげ茶の髪をアップにして結い上げてあった。

女性に興味がないとはいえ、ここまで完成された美に出会ったのは初めてだ。

ダイアナ、と名乗った女性の美しさに思わず息をのんだ。

「あ、ああ……ご丁寧にありがとうございます」

引っ越してきた、と言われて思い出す。そういえば一軒向こうにずっと家を建てていた気がする。きっと建築が終わって引っ越してきたのだろう。

では、もう一人は？

視線を移すと、もう一人の女性も　いや、少女と呼ぶか微妙な  
年頃だろう。漆黒の瞳が何かを求めるように自分を射抜いていた。  
その瞬間、心臓が跳ね上がった。

見下ろす位置にある大きな漆黒の瞳は無垢で、一点の穢れもなかつた。

なぜだろう、心のどこかがかき乱されている。

大きな目にバランスのとれた鼻と桃色の唇。絵に描いたような美少女だった。それも、大人との境界で危うい魅力を保っている絶世の美女だ。艶やかな漆黒の髪はまっすぐ胸のあたりまで落ち、象牙色の頬を彩っている。

震えそうなほどの強い感情があふれ出してきた。

これは……歓喜？

「何でかな」

少女が口を開いた。

その声に魂が揺さぶられる。

「あなたを見てると、すごく悲しい事を思い出しそうな気がするよ」  
少女の漆黒の瞳が潤んでいった。その涙にどうしてこんなにも胸が痛むのだろう。どうしてこんなに

少女の頬を美しい雫が伝う。

その瞬間、心の籠<sup>たか</sup>が外れた。

欲望のままに手を伸ばす。その滑らかな象牙色の肌に、涙にぬれた頬に。

どうしてこんなに感情が揺れ動いている？ステラに何を言われても反応しなかったこの心がどうしてこんなにも歓喜を叫ぶ？初対面のこの少女を今すぐに抱きしめたいと思うこの感情は一体何だ……？  
温かい頬に伝う涙を指でぬぐった。次々にあふれ出る雫を止めるように何度も、何度も。

すると少女はその手に小さな手を重ねてきた。  
触れたところからやさしい感情が伝わってくる。

会いたかった。ずっとずっと、会いたかった　　ずっと、探していた。

そうしてしばらくただ涙を流す少女と見つめあっていた。

が、少女は唐突にはっとして手を振りほどいた。その瞬間、拒絶されたことに心が敏感に反応してナイフで抉られるような感覚を受けた。

なぜだ。先ほど初めて会った少女にどうしてこんなに感情が揺れ動く？

何とか心臓を落ち着けて、もう一度少女を見下ろした。

あと2・3年もすれば完全に花開くであろう美貌を持った少女。  
大きな漆黒の瞳には強い意志が秘められており、その強さにどきりとした。

とにかく動揺していた。

突然少女が泣き出したことにも、自分がこれほど感情を揺らした  
ことにも。

そのせいだろう、思わず不機嫌な声で言い返してしまった。

「お前……誰だ」

すると少女は慌てて腕で涙を拭って目を逸らした。

そして、呟くように早口で告げた。

「わたしはグレイシャー・グリフィス。この家の隣に住んでるんだ」  
グレイシャー・グリフィス？

聞き覚えのない名前だ。

それにしても、怯えたのか全く目を合わせようとしない。なんと  
なくそれが気に食わなかった。

「挨拶する時は人の目を見ると習わなかったのか？」

すると少女はその美しい容姿に不釣り合いな幼い表情を見せた。

愛らしい桃色の唇を尖らせて上目づかに文句を言う。

「まだ名乗ってもないヒトに言われたくないよ」

ああ、そうか名乗っていなかったか。

それにしてもこの少女の態度は少しばかり生意気じゃないか？

「俺はウォルジェンガロータス。街で酒場の店主をやっている。

ついでに言う朝帰りで寝ていたところを叩き起こされて非常に機嫌が悪いんだ。分かるか？」

正論だったのだが、どう見ても10代後半の少女はまるで幼い子供のように言い返してきた。

「だからってシツレイじゃない？ わたしは何も悪い事してないのに！」

その言い草にまたいらする。

「じゃあ今度お前を夜中に叩き起こしてやるから覚悟しておけ」

半分本気でそういうと、少女の眉が跳ね上がった。

が、そこはもう一人の女性　ダイアナが留めた。

「まあまあグレイス、今日は私達が悪いわ。日を改めましょう」

さすがに落ち着いた雰囲気の彼女が丁寧な謝罪し、二人は帰って行った。

しかし、ベッドに戻った後もあの強い意志を反射した漆黒の瞳が瞼の裏から消えてくれなかった。

## SECT・2 美貌ノ夫婦

訪問者が帰ってから、腑に落ちない感情を抱えたまま夢現の境を彷徨い、いつしか夕刻になっていた。カーテンの隙間から橙の光が差し込んでいる。

最悪だ。

寝不足の頭を抱えて店に出ると、すでにリッドが準備を始めていた。

「おはようございます、店長」

「ああ。早いな、リッド」

「今日は開店前に干し肉を補充しておこうと思って。あ、あと窓枠の修理はさっきやっておきました」

「ありがとう」

リッドは非常に有能な働き手だった。働き始めてほんの一月だが、今では彼がいないと店を維持できないだろう。常に満席が当たり前となってしまった今、もう一人くらい雇う人間を増やすことも考えていた。

眠い頭で料理の下ごしらえをしながら昼間の二人を思い出す。

そうだ、思い出した。女性客たちが最近引越してきた夫婦のことを噂していた。二人とも目の覚めるような美男美女で、おそらく夫のほうに剣術の嗜みがあるのだろう、今現在は街はずれに剣術道場を作っている最中だとか。

できたら子供を通わせよう、と言っている者もいた。

夫はまだ見ていないが、妻の方はなるほど、噂に上るほどの美人だった。それもきつい印象はないどこか知性と教養を感じさせる穏やかな女性だ。もしかすると、戦争の影響で地位をなくした貴族なのかもしれない。

では、もう一人……あいつは何者だ？ダイアナと並んでも何ら遜色ない美貌を備えた漆黒の瞳の少女。思い出すだけで心乱される、

あの娘は一体

「店長、焦げてますよ！」

リッドの声ではっとした。

慌てて奥にあった竈かまどに駆け寄るが、すでに遅く手元には焦げ付いた鍋が残った。

「珍しいですね、ぼんやりするなんて。何か悩み事ですか？」

「少し寝不足なだけだ」

「大丈夫ですか？ お疲れでしたらオレがあとやっときますよ」

リッドは大きな栗色の瞳を心配そうに細めた。

「いや、大丈夫だ、ありがとう」

どうやって育てられるとこんな青年が出来上がるのだろう。目端が利いて人への気遣いも忘れず、笑顔も絶やさない。女性客が今も増え続けているのも頷ける。

王都を離れてよかった。心からそう思う。

自分はもう今年で26になる。もうとつくに落ち着いていてもいい年なのだが、全く女性には興味を持てなかった。そのせいで親類に嫌みを言われることも多かったし、無理な縁談を持ちかけられたこともあった。

息苦しく閉塞した暮らしに終わりをづけ、自由を手に入れた。

このまま穏やかな生活を送る一生もいい。この街の片隅でゆとりとした時に流されながら、何をするでもなく休みたい……もつとも、店を開けている間は全くそんなこと考える余裕もないが。

開店と同時にだれ込んできた客たちを見て軽く苦笑が漏れる。

忙しければいい。そうすれば何も考えずに済む。

あの、強い意志を秘めた漆黒の瞳も

今日も店は大繁盛だ。10席ほどしかないカウンターには談笑する女性たちであふれている。

女性に興味のない自分だからいいが、普通の男性はこれだけの人間に一度に話しかけられると気が狂ってしまうのではないだろうか？それともやはり嬉しいなどと思ったりするのだろうか……わからない。きっと自分には一生分からない気がする。

こうして何も考えずに作業している時間が一番好きだった。

向けられる質問に淡々と答え、リッドの通した注文をこなしながらぼんやりとそんなことを思う。

「店長、カシスが足りないんで倉庫からとってきます」

「ああ、わかった」

そう答えた時、店の扉が開いて新しい客が入ってきた。いらつしやいませ、と言いかけて思わず口を閉ざした。

珍しい男性客だったからという理由だけではない。たえ同性であつたとしても思わず見惚れるような美丈夫だったからだ。

作業ズボンにノースリーブ姿だが、そんなラフな服も彼の魅力を損なう理由には全くなならない。その場の視線を一気に集約する柔らかくもどこか澄んでいる一種独特の空気を纏っており、光の加護を受けた明るい金髪と翡翠の瞳ジェイドが目を惹いた。唇に湛えた柔らかな笑みは完璧なまでに整った顔立ちによって生じる近寄り難さを取り払っていた。

店中の客が硬直し、釘付けになった 次の瞬間、悲鳴のような歓声があがる。

さすがにその嬌声にびっくりとした男性だったがすぐに笑顔に戻った。

客たちは我先にと男性を腕をとり、中央の一番大きいテーブルの中央に据えた。

そこへ丁度酒瓶を両手いっぱいに抱えたリッドが戻ってくる。

「ああ、あれが噂のクラウドさんですね。話に聞いた通りだ」

「クラウド？」

問い返すとリッドは酒瓶を棚に並べながら答えた。

「ほら、街はずれに美男美女の夫婦が引っ越してきたって噂、聞いた」



たでしょう？」

ああ、なるほど。あれが昼間に訪れたダイアナの夫という人物か。噂などあてにはしていなかったが、話に違わぬ美丈夫だ。

だが、なぜ彼がこの店に？

と眉を寄せると開け放たれたままだった扉からさらに二人入ってきた。

昼間自分の家を訪れた二人だった。

なぜあの二人がここへ来るのか。

愕然と見つめる。

ダイアナは華奢な肢体を空色のワンピースに包み、上質なケープを羽織っていた。その姿はふわりと温かな空気を纏っていたがどこか凜として、気品があった。やはり彼女は元貴族なのかもしれない。確かに夫だと思われる先ほどの男性と並べば高名な画家の描いた絵のように完璧だろう。

そして、もう一人。少女は艶やかなストレートの黒髪を胸元で揺らして柔らかなベージュ色をしたひざ丈のワンピースを纏っているのだが、シンプルなそのデザインと足元の皮サンダルのためにどこか幼く見える。少女は恐る恐る店に足を踏み入れ、物珍しそうに辺りを見渡していた。

「いらっしやいませ！」

リッドが明るい声で出迎える。

そして、こつそりとつぶやいた。

「きっとあの人がダイアナさんですよ。本当に美人だなあ！」

リッドらしい、素直な感想だ。おかげで肩の力が抜けた。

「でも、隣の子は誰でしょう？ あの子もすごい可愛い子ですね

！」

「……さあな」

それは自分が知りたい事だ。

店の一番端席に着いた二人に注文を取りに行ったりリッドを見送つ

て、カウンター席の女性たちの会話に耳を傾けた。

「何でクラウドさんたちがここに?!」

「分からないわよ! 私に聞かないで!」

話題はどうもあの夫婦が中心だった。戦争で没落した貴族だろうというのが街の人たちの見解の一致のようだ。

ところがあの少女のことはほとんど話題に上らない。

「すまないが……」

思わず口を挟んでいた。

一瞬にして数十の目がこちらを向く。

後々遺恨とならないよう誰か一人でなく全体を見渡すように視線を分けて質問した。どうも最近こんな能力ばかりが卓越していく。

「あの、先ほど入ってきた女性と一緒にいる少女は何者だ?」

すると女性たちの目が一斉に煌めいた。

我先に、と口を開く。

「あの子はね、可哀想な子なのよ!」

「戦争で家族を失って、3か月ほど前に親類を頼ってこの街に来たらしいの!」

「その親戚自身ももう引越してしまっていてグレイス、あ、グレイスっていうのはあの子の名前ね! グレイスは一人街はずれで生活しているらしいのよ」

「少しばかり抜けてるんだけど本当にいい子だね」

「よくダイアナさんと一緒に買い物してるわよ」

3か月前 自分がこの街に越してきたのとそう変わらない時期だ。

「戦争中からこの辺りに越してくる人は多かったものね」

「私も戦争中にここに来た身だし」

「この辺に住む人は本当に増えたわよねえ」

ここにいるのは自分と同じくらいの年齢の女性たちだ。

きつと彼女たちそれぞれも様々な人生を送ってきたんだろう。苦楽を乗り越えて今この場にいるんだろう。そう、きつとあの漆黒の

瞳をもつ少女も。

そう思って店内に目を移した時、  
劈くような女性の悲鳴が響き渡った。

### SECT・3 クラウドⅡフォーレス

店内が騒然となる。

「どうした?! 何の騒ぎだ?!」

見ると、端の一番小さなテーブルに黒髪の少女が突っ伏し、ダイアナは蒼白な顔でその肩を揺すっているところだった。

「ラック!」

中央で女性に囲まれていたクラウドもそう叫んで立ち上がり、すぐに少女のもとへ向かった。うつ伏せになっていた少女を起こして具合を見る。

心臓がすごい速さで脈打っていた。

クラウドが叫んだ言葉　ラック。何故だろう、こんなにも心が反応している。が、いったいその名は何だ?あの少女はグレイスとこのではなかったのか?

リッドがおろおろと騒ぎの輪の中心にいるのが分かった。

「大丈夫、眠っただけのようだ。どうやらこの子は素晴らしくアルコールに弱いみたいだね」

クラウドはよく響くテノールでそう言うと、こちらに向かってにこりと微笑んだ。

「どこか休ませる場所はないかな?　店長さん」

仕方がないので併設している宿の一室を貸すことにした。だがそこらは自分ではなくステラの管轄だ。勝手に使うと後で何を言われるかわからないが、意識の途切れた少女を店に転がしておくわけにもいかないだろう。

クラウドとダイアナが付き添って、無事少女をベッドに寝かせることが出来た。二階に上つてすぐ、一人一泊用の小さな角部屋。

扉を静かに閉めて階下の店に戻った。

降りてみると、客はいくらか減っていた。先ほどの騒ぎと、自分

が席を外したことが原因だろう。悪い事をしてしまった。

ずっと一人で働いていたリッドがぱつと顔を向ける。

「あ、店長。あの子大丈夫だった？」

「ああ。心配ない。今彼らが付き添っている」

「よかった！」

リッドは心の底から安心した顔を見せた。

カウンターに残っていた女性たちもほつとした顔を見せた。それほどにあの少女は街の人間たちから愛されているらしい。とてもリッドに触ったの触らないので乱闘を起こした、もしくはすぐに口論となる女性たちと同一のものとは思えない。

子は銚かすがいと世間一般で言うようだが、まさにあの少女は年上の女性たちの心を驚掴みにしているようだった。

本当に不思議な奴だ。

そう思いながら定位置であるカウンターに収まった時、クラウドが店の奥にある階段を軽い音をたてて降りてきた。

「やあ、すまないね。グレイスが起きたらすぐに連れ帰ることにするよ」

「構わない。たまにあることだ」

朝方まで開いているこの店において飲みすぎで動けなくなる客は少なくない。これまでも何度か部屋を解放したことがあった。むしろ宿屋の店主に知られれば叱られること必至なのだが。

クラウドは穏やかな笑みを湛えてカウンターに向かってきた。

改めて見るとこの人の人並み外れた美しさが際立っていた。こんな小さな街の片隅にある酒場にいるには勿体ない美貌だ。

「お詫びと言っては何だが、少し手伝おうか？」

「いや、いい。今ので人も減った。手は足りている」

「ふうん。しかし、君もリッドくんもずいぶん忙しそうに見えたよ？ もう一人くらいバイトを雇う余裕はありそうだったか？」

「……検討中だ」

カウンターにいた女性たちが避けて無条件でクラウドの席をつく

る。ちょうど自分の真ん前に。

少し遠巻きに自分とクラウドのツーショットを眺めているのはすぐに分かったが、無視することにした。

「彼女……グレイシャー・グリフィスとはどういう関係なんだ？」

「お隣さんだよ。特にダイアナは妹のように可愛がつていてね、グレイスもよくうちに遊びに来るんだ。どうやら懐かれてしまったようだね」

「グレイス……さっきは別の名で呼ばなかったか？」

何だったろう。確か、『ラック』とか……。

「いや、呼んでいないよ。あの子の名はグレイスだ」

この笑顔で何かいろいろ誤魔化されている気がするが、まあいいだろう。少なくとも聞いて答えてくれる人間ではなさそうだ。

「ジンをひとつ頼めるかな」

頼まれた酒をグラスに注ぎ、目の前に置くとクラウドは優美な仕草でそれを口に含んだ。遠巻きの女性たちからため息が漏れる。

金髪に緑翠の美丈夫は伏し目がちにぼつりとつぶやいた。

「私もダイアナもあの子が可愛くて仕方がないんだ。いつでも幸せを願っている。普通の、何の変哲もない日常の中に生きて欲しいと思っている」

その言葉にどきりとした。自分が心のどこかで願っていたことをそのまま代弁されたかと思った。

「もしよければ……ああ、店があるから強要はしないが、君もうちに遊びに来るといい。店主さん、君とはまるでどこかで会ったことがあるような気がするよ」

妙になれなれしい口調。甘いテノール。女性なら一瞬で恋に落ちるようなシチュエーションだった。

それでも全く不快ではない。というのも、自分も同じことを思っていたからだ。

この人とは　もちろんグレイスという漆黒の瞳の少女もダイアナも含めて　全く初対面という感じがしなかった。まるで昔から

知っていたかのような不思議な感覚に見舞われていた。

そのせいだろうか。思うより先に口から言葉が飛び出していた。

「ありがとう。是非……伺おう」

街に越してきてから安寧に浸かるだけで人に関わろうとは思っていなかった。

ところが、少しずつ変化は訪れていた。

店を開くようになり、街の人々と触れ合い、そして　この3人に出逢った。まるで見えない運命の糸が導いているようだ。

何かが始まる予感があった

が、漠然とし過ぎているそれはすぐに忘れてしまった。

明け方近くなってほとんど客が引くまでずっとカウンターに居座っていたクラウドと様々な話をした。

自分の故郷のこと。親類の家に引き取られたこと、折り合いの悪さと望まぬ縁談。不自然なほどに次々話してしまっていた。これほど話したのはこの街に来てから初めてだった。

一通り話が途切れると、クラウドはにこりと笑った。

「すまないが、少しだけグレイスとダイアナの様子を見てきてくれないか？」

あまりに自然な言葉だったために、彼の笑顔に誤魔化される形で水の入ったコップを一つ手に持ち、リッドに店を任せて二階に上がった。

クラウド自身が行けばいい、などとは思いつかなかった。

もしかすると自分自身あの少女のことが気になっていたのかもしれない。

部屋をノックするとダイアナの返事があつてすぐ扉が開いた。

「ああ、店長さん。お水？　ありがとう」

そのまま水の入ったコップを渡して下に降りようとすると、ダイ

アナが引きとめた。

「ごめんなさい、少し代わりに見ててくれないかしら？」

この笑顔には逆らえない。その意味では似た者夫婦なのかもしれない。

ダイアナが部屋を出ていくのを見送ってベッドの中の少女を覗き込む。

酒のせいがかすかに上気した頬が色づいていた。かすかに開く桃色の唇からは規則正しい呼吸が感じられる。安らかに閉じられた瞼から苦痛の色は見られなかった。幼い子のように眠る姿は素直に愛らしいと思った。

初めてこの娘を目にした時、自分はいったい何を感じ取ったんだろう？

それをもう一度確認するようにじつと寝顔を見つめていた。

が、ダイアナはなかなか帰ってこない。仕方ない、今日は寝不足で疲れているし、休憩だと思ってもう少しここにしよう。

そう決めると、ふと思いついて額に手を当てる。熱はないようだ。すぐに回復するだろう。そう思った時だった。

長い睫がかすかに揺れた。

「……あ」

少女の唇が動く。

うつすらと漆黒の瞳が見えた。

「アレイ、さん……」

「?!」

心臓が驚掴みにされた。

息が止まる。苦しい。狂おしいほどに切ない。ただ安らかに眠る少女が、どうしてこんなにも愛おしい？

もう一度目を閉じた少女の黒髪を撫でる。

ゆっくりとベッドの脇に跪いた。

「ラック」

自分の喉から無意識で漏れた名にも気付かないほどに。



吸い込まれるようにして少女の桃色の唇に口付けを一つ落としていた。

## SECT・4 思イ得又過去

どうしてあんなことをしてしまったんだ？

動揺、自問自答、自己嫌悪。

様々な後悔が一気に押し寄せてきた。

「どうしたんだい、ウォルジェンガ。眉間に皺が寄っているよ。いい男が台無しだ」

いつしか名を呼ぶようになったクラウド。その馴れ馴れしさは不快ではなく、むしろ心地よかった。

「いや……なんでもない」

「そんな風には見えないよ？」

そう言った彼は当たり前のように閉店作業を手伝ってくれた。

リッドは店の掃除、自分はクラウドと並んで奥で食器洗いや明日のための食品補充を行っていたのだが、どうにも手が進まない。原因はわかっていて。分かりきっているのだが……悶々とするばかりで自分の中の感情に答えが出ない。

気がつけば洗い終わった食器をもう一度洗い直していた。

「店長！ 本当に大丈夫ですか？！」

リッドの声ではっとする。

「最近ほんとに忙しいから……店長、ほとんど休んでませんよね？オレもがんばるけど、もし余裕あるならバイトもう一人くらい雇いませんか？」

「そうするといい、ウォルジェンガ。君は少しばかり働き過ぎだ」クラウドも穏やかな声で同意した。

「ですよ、クラウドさん！」

リッドがオーバーリアクションで頷いて、栗色の瞳で見上げてきた。ちょうど目線が自分の肩の高さと同じくらい。この年頃の青年としては平均より少し大きいくらいだろう。自分の背が少しばかり高すぎただけだ。

「無理しないで下さいよ、店長！ 働き過ぎで体壊すなんて旧時代的なことは頼むからやめてください。そんなの……何の価値もない自分を犠牲にするなんて美德でも何でもない！」

悲痛な色が映っている栗色の瞳は今にも泣きそうだった。胸元を掴んで必死な口調で訴えるリッドは真剣そのものだった。

意外なほど熱の籠った口調に、一瞬驚いたが、すぐに息をついて言い聞かせるように言葉を紡いだ。

「新しいバイトの事は考えておく。落ち着けリッド。自分を犠牲になどと大袈裟な……確かに今日は少し寝不足だったが、明日にはもう回復する。とにかく、手を放せ」

するとリッドははっとしてすぐに手を解いた。

そのまま後ろを向いて早口で告げる。

「オ、オレ、店の掃除してきます！」

そのままたたつと駆けて行ってしまった。

クラウドもその様子を見送って楽しそうに笑った。

「いい子だね」

「……そうだな」

「彼の言うことをきちんと噛み砕いて刻むといい。それは君に最も必要なものはずだ……ウォルジエンガ」

クラウドの言葉に思わず首を傾げた。リッドが先ほど口にしたのは、考えるほど難しい台詞ではなかったからだ。

「リッド君と言ったか、きっと彼も過去に苦労したんだろうね」

クラウドはそんなことお構いなしににこにこ言葉を続けた。

「無理にとは言わないが、次の休みには是非うちに遊びにおいで」

リッド君もつれて。きっとダイアナも喜ぶ」

店の片づけをすべて終えて二階へ向かう。クラウドが先に部屋へ行ったはずだ。

二階の角部屋の扉を軽くノックすると、クラウドの声が返ってきて

た。

ベッドの上には黒髪の少女が起き上がっていた。まだ閉じそうな瞼でこちらを見ている。その視線に囚われそうになって慌てて眼を逸らした。

あの時の想いと感触が蘇りそうになって声が震えそうになる。

「起きたのか？ 歩けそうならすぐに帰れ。宿の主に知られる前に

……」

ステラに気づかれると面倒だ どうして、いやな予感ばかりが当たってしまうんだろう。

「誰に知られる前に、ですって？」

背後から厭味ったらしい女性の声が響いた。一番聞きたくなかった声だ。

最悪だ。

「人の宿の部屋を勝手に使っておいて何て言い草かしらね、ウォルジエンガ。使う時はまず持ち主に尋ねるものでしょう？」

「すまない」

とりあえず素直に謝罪した。言い訳などすれば余計にステラの神経を逆なでするだけだ。

ステラはセピアの瞳でベッドの上の少女を睨みつけた。

「いったい誰なの？」

誰だ、と聞かれても……それは自分が聞きたいことだ。

「……隣の住人たちだ」

簡潔に説明したつもりだったのだが、ステラは全く納得しなかった。

「それがどうしてこの部屋で勝手に寝てるの？」

にしても機嫌が悪すぎる。普段のステラなら酔いつぶれて宿を使った女性客には嫌みの一つだけで宿代を請求し、さっさと追い返すのに……今日はなぜか口調も荒く、敵意をむき出しにしている。

何より少女に噛みつくような視線が気に食わなかった。

「気分が悪くなったから休ませていただけた。もう店も閉めるし、

すぐ帰らせる。勝手に使ったことは謝るが、これまでも何度か客をここに寝かせたことはあるはずだ。なぜそんなに声を荒げることがある」

言い返すと、ステラはさらに機嫌を悪くした。

一触即発の空気が部屋を満たす。

それを破ったのはクラウドのやさしいテノールだった。

「すみません、お邪魔しました。宿代は規定通りお支払いします…

…さあ、グレイス、帰ろうか」

そう言ってクラウドは少女に背を向けて跪く。

「乗って。家まで送るよ」

一瞬ためらった少女は、それでも安心したようにクラウドの背に体を預けて首に手をまわした。

それを確認して立ち上がったクラウドはこれまで見た中で一番優しい表情をしていた。幼く愛しい娘に向ける慈愛の微笑み。それはまぎれもなく父親のものだ。

背の少女も安心しきった表情を見せる。

ダイアナを促し、ステラに軽く会釈をしてクラウドは部屋を後にした。

「さっきの子、誰？」

「だから隣の家の人間だと言っている。あの夫婦もだ」

ステラの相手は非常に面倒だ。自分の一番苦手な人間像。どうしようもないほど自身中心で他人はみなステラ自身のためにいると思っっている。少しばかり恵まれた容貌をしている、ただそれだけほんの少し勘違いし、そのまま育ってしまったのだろう。

話しているとわけもなく苛々する。

明るい金髪とセピアの瞳が誰かを思い出させようとするからかもしれない。大きく胸元のあいた細身の黒いドレスも心を掻き立てる。だが、違う。

何かが絶対的にズレている。そのズレが、苛立ちを加速させる。

「ただの隣人？ そんな風には見えなかったわよ？ あの夫婦はともかく、あの子……あんな小娘！」

ああ、苛々する。この曖昧さが気持ち悪い。  
あの少女が何者か知りたいのは俺のほうだ。過去に会ったことあるのか？ いつ、どこで？ どんな風に出会っている……？

あの少女は最近までカトランジェという小さな街で暮らしていたという女性客の言葉を信じるなら、出会う機会はなかったはずだ。自分はずっと王都にいたのだから。

王都で親類たちのもと 親類？

そこまで考えて愕然とした。

「……何か言いなさいよ、ウォルジェンガ！」

ステラの声が遠い。

耳元で心臓の音が鳴り響いている。

自分の記憶と日常が崩壊する音を聞いた。

いったいどうやって家まで辿り着いたのか分からない。

気づけば家のベッドの上で横たわっていた。

何もかもが信じられなかった。自分の記憶さえも

「俺は一体、誰だ？」

ウォルジェンガ＝ロータス？ 本当にそんな名なのか？ いったい何を信じたらいいい？ 曖昧な記憶の中には、親族の顔はおろか構成していた人々も、住んでいた家も周囲の景色さえ記憶に残っていないのに……？

体に刻まれた無数の傷が疼いている。

思い出そうとする心と抑制をかける何かで自分の中でぶつかり合っている。

俺は死なない。お前の傍からいなくならない

頭の中に響いた誓いの台詞はいったい誰のものだ？

「教えてくれ……！」

呻くような呟きは部屋の空気に霧散していく。

裂くような胸の痛みが、蠢くような傷の疼きが消えることはなかった。

## SECT・5 夢ノ終ワリ

ここのところよく眠れない。それはきつと夢見が良くないせいだろう。

夢の中の自分は常に誰かと戦闘している。長剣を手に駆け回り、敵を両断し、さらなる敵に向かっていく。手に伝わるのは人と、人ならざる物を切る感触。

目覚めればいつも後悔と自責の念に囚われた。

そのせいで昼に目を覚ましてしまう。

仕方がないので顔を洗おうと裏口から外に出た。

すると、あの少女の家を挟んだ一つ向こう、道場を建設中のクラウドと目があった。

「やあ、ウォルジエンガ。今日は早いね」

穏やかな笑みを湛えた美丈夫は軽く手をあげて挨拶した。昼の休憩中だったのか、そのままこちらに寄ってくる。

「どうしたんだい？ 浮かない顔だね」

「あ、いや……」

誤魔化そうかとも思ったが、何となく誰かに話しておきたい気分だった。

全身に残る傷の事はさすがに話せなかったが、起きてからも拭えない夢の感覚がいつたい何なのか、その不安を外に吐き出してしまいたかった。

記憶にないが徴兵されて戦場にいたのだろうか。それにしても、全く覚えていないのはおかしい。

「過去がないのは不安かい？」

クラウドの言葉に一瞬詰まった。

肯定も否定もしなかったが、彼はふわりとほほ笑んだ。

「そつだろうね。辛くて……苦しいはずだ」

視線を伏せて黙り込むと、クラウドはいつの間にか木刀を2本手



にしていた。

首を傾げた自分に彼は微笑んで木刀を1本差し出した。

「そういう時は体を動かすのが一番だよ。知っていたかい？」

「だが俺は剣術など」

「大丈夫。私の道場に來た最初の道場生だ。ゆっくりと教えよう」

そう言われてしぶしぶ木刀を受け取って右手で持った。

クラウドも優雅な仕草で木刀を構えた。

「大切な人を守るためには力が必要だ。その人を傷つけさせないため、そしてその人の隣に続けるため」

ゆっくりとした動きで振り下ろされた木刀をとつさに受け止めた。軽い負荷が腕にかかる。

夢の中の感触が立ち返ってきそうになって顔をしかめた。

「何より剣を振っていると心が落ち着く。剣の道が与えるのは身体的な強さだけではない」

「……俺の中の迷いも断ち切ることができるか？」

「ああ、もちろんだ。君の鍛錬次第だが」

片手で持っていた木刀を両手に持ちかえる      なんだろう、かす

かな違和感がよぎる。

構えが違う。

違和感がぬぐえない。

「扱いづらそうだね」

クラウドが微笑む。

「剣を左手だけで持ってみるといい。きっと……世界が違って見えるから」

左手で？もともと自分は右利きだから、右手で持つのが普通だと思っただが。

それでも、言われるがままに木刀を左手に構える。

「……あ」

この構えはしっかりと体に馴染んでいる。不思議なほど落ち着いた。

なぜそれがクラウドに分かったんだろう？

「さあ、今度は少し強く打ちこむよ？　気をつけて受け止めるんだ」  
この金髪の美丈夫は、いったい自分の何を知っているんだ？　もしかすると、失った過去を知っているのではないか。あの少女との関係や全身に残る傷跡のことも

考える前にすさまじい速度で打ち込まれた剣を受け止めるので精いっぱいだった。

汗だくになるころにようやくクラウドは剣をおさめた。彼は汗一つかいていない。

「少し鈍ったようだね。これからは毎日鍛錬をするといい、その方が君にとってもいいはずだ」

それは、自分が過去に剣を振っていたことをよく知る者の口ぶりだ。

「っ……クラウド、お前は」

過去の俺を知っているのか？

そう聞こうとして、はっとした。

緑翠が悲痛な色を映し出していたからだ　同時に確信する。この人は自分の過去を知っている。

聞けなかった。おそらく自分の過去に関わることで彼も深く傷ついているから、その傷を抉り出すようなことはできなかった。どんなことがあったかは分からないが過去を捨てて逃げた自分には何を聞く資格もない。

「いや、忘れてくれ」

ただ分かるのは、クラウドもダイアナも自分のことをとても大切に、温かく見守ってくれているということだけだ。それはあの少女も例外ではないのだろう。

きつと過去は親しい間柄だったはずだ。

それらすべてを封印し、この平和な生活を送りたい。そう思うことは罪なのだろうか？

数日後、いつものように眠っていると突然劈くような悲鳴が響き渡った。

思わず跳ね起きる。

まだ昼間だ。いったい何だ？！

声のもと、リビングの方に向かうと、そこにいたのは　あの黒髪の少女だった。

なぜ人の家にいるんだ？！

「お前ここで何をしている！」

周囲には果物や野菜が転がっていた。何かに脅えるようにがたがたと震えた少女は自らの両手を翳<sup>かざ</sup>している。

その手を見てはっとした。

いつも左手にはめていた白い手袋が取り払われ、露わになった左手の甲には毒々しい色の血管がいくつも浮かび上がっていたのだ。全身の血の気がざっと引いた。

少女の目の焦点が合っていない。いったい何が見えているのか、揺らぐ視線はこちらを見ようとしなかった。

「おい！　お前……」

目の前に立って肩を揺らすと、ようやく現実に取り戻されたようで震えが止まった。

「……ルシ……ファ」

その言葉を最後に、少女は意識の糸を断った。

悲鳴を聞いて駆けつけたダイアナとリッドから、勝手に俺の家に潜り込んでパーティを計画していたことを聞く。それが不法侵入だとわかつているのだろうか……ただ、今はそれよりも少女のことが心配だった。

仕方がないので自分のベッドを明け渡し、少女の体を横たえた。最後に少女が漏らした言葉が気になる。

「ルシファ」

思わず口に出した言葉に、隣のリッドがぎよっとする。

「て、店長！ そんなこと口に出しちゃ駄目ですよ！」

「……わかっている。だが、こいつが先ほど倒れる直前に口にしたんだ」

「グレイスが？」

リッドも眉を寄せる。

なぜかという、ルシファというのは先日の戦争で滅びたグリモワール王国が崇拜していた悪魔の頂点、魔界の創造主とも呼ばれる「リュシフェル」のことだからだ。

セフィロト国が支配するこの土地でそんな名を口にすれば即座に罰を受けるだろう。

今は呼吸も穏やかに安定し、眠りについた少女の傍でじっと唇を噛んだ。

「大丈夫だよ、グレイス……」

リッドの不安そうな声が響く。

「ええ、きっと大丈夫よ。この子はとても強いから」

ダイアナは優しく微笑んだが、心のどこかに多くの違和感が残された。

少女が目を覚めたのは外がすっかり暗くなってしまってからだった。

ゆっくりと開かれた漆黒の瞳。

「よかった、グレイス……」

ダイアナが真っ先にベッドの脇に跪いた。

「あれ……わたし……？」

ゆっくりと起き上った少女の漆黒の瞳が順にその部屋にいる人間を見渡し、最後に俺の方をじっと見つめた。

澄んだ瞳から目が離せなくなる。

「ごめん、ありがとう。心配かけたよね」

一瞬だけ作り笑顔でそう言った少女は、すぐ真剣な顔に戻ってぽつりと呟いた。

「あのね、ウォルジエンガさんと二人で話したいんだ……少しだけいいかな？」

リッドが驚いた顔をする。

「えっ、でも、グレイス……」

「いいだろう。ちょうど俺もそう思っていたところだ」

気がつけばリッドの言葉を遮るようにそう言い放っていた。

## SECT・6 共二生キヨウ

静かな部屋に残されたのは自分と、謎の少女。初めて出会った時からそうだった。いつだってこの漆黒の瞳に心乱される。

壊れそうに愛おしい、狂おしいほどに切ない。

今すぐにでも抱きしめたい この感情はどこから湧き上がっているのか。

「ウォルジエンガさん……でいいかな」

「ああ、そうだ」

「でもそれ本名じゃないよね、きっと」

少女の言葉が胸に突き刺さった。

やはりこいつは自分の過去を知っているらしい。

「ああ、そうだろうな」

教えてほしい。自分の過去に潜む影。戦いの中で生き抜いてきたらしい自分が秘めた罪。

「だが本当の名は俺にもわからない」

その言葉は思いがけなかったようで、少女はきゅっと眉を寄せた。  
「……え？」

「この街に来る前25年間の記憶はぼんやりとしか残っていない。

まあ、その記憶もすべて幻想かもしれないが」

そう告げると、目を丸くした少女から笑みが零れた。

なぜ笑う？こっちは端から真剣だというのに！

苛立つて思わず声を荒げた。

「何がおかしい？俺を馬鹿にしているのか？お前は俺を知っていたはずだ。この街に来る前の俺を」

この傷の理由も、思い出せないわけも。

「そうでなくては、お前にこれほどまで心かき乱される理由がない！」

少女の漆黒の瞳がまっすぐに射抜いている。

何故だ。こんなにも胸が……痛い。

「教える！ 俺はいつたい……誰だ？」

ところが少女はさもおかしそうに笑った。

「……ははっ」

「まだ笑うか！」

思わず怒鳴っていた。

一瞬だけ部屋に沈黙が訪れた。

ところが、少女は泣きそうな顔になって首を振った。

「違うよ」

潤みそうになっている瞳にどきりとした。

「わたしも……同じなんだから」

同じ？ いったい何が？

困惑して立ち竦むと、少女は淡々と述べていった。

「わたしもここに来るまでの記憶がすごく曖昧なんだ。すごく幸せにカトランジエって街で母さんと暮らしてた気がするんだけど……」

記憶が曖昧……？ それではこいつも過去を知らないというのか。

知らず、自分の感情をかき乱しているというのか？

返答できずに佇むと、少女は突然服を脱ぎ始めた。

「なっ、何をして……？！」

慌てて眼を逸らして背を向ける。

いったい何を考えている？！

「見て」

少女の言葉の意味が分からない。

「馬鹿か！ お前は！ 見られるか！」

「いいからこっち見て！ 別に変な意味じゃないから！」

変な意味じゃないと言われても、こんな暗い部屋の中で男女が二人きり、という状況では妙な想像しかできない。

それでも、叫んだ少女の声は悲痛だった。

ゆっくりと、振り返る。

「とてもじゃないけど……平和の中にいたとは思えないよね」

下着姿の少女。滑らかな象牙色の肌に釘付けになった。

「お前……」

その姿は、とても幸せに暮らしてきた少女のものとは思えなかったからだ。

細い肩、そこから滑らかな背に向かって大きな逆十字の傷がある。首から腰に向かってくつきりといった深い傷痕。それだけでなく、首筋にも同じ傷が刻まれ、さらに肩の少し下のあたりに貫いたような引きつる傷跡がある。伸ばした左腕は肘のあたりで千切れた跡があるし、手の甲は赤黒い血管が浮いていた。

とても年頃の少女とは思えない凄惨な傷に息を呑んだ。

肩越しにふりがえった少女は泣きそうな顔をしていた。

「すごいよね。びっくりするよね。でも、覚えてないんだ。いつ受けたのかも、どうして誰につけられたのかも」

悲痛な響きに、自分とおなじ苦しみを感じる。

過去もなく傷だらけのまま突然平和な暮らしに放り込まれた。

平和は、確かに有り難く幸せなものだが、それは過去の上に成り立つものだ。それがたとえどれほど悲惨なものであったとしても。

過去のない自分たちは、いくら安心した生活を与えられても何も考えず享受することなどできない。

「わたしには過去がないよ。戦争ですごく酷い目に逢ったのかも……記憶をなくすくらいに」

少女の肩が震えていた。

もういい。もう……いいんだ。

お前は自分自身を傷つけることなんていいんだ。

「でも、これだけは覚えてるんだ」

くるりと振り返った少女。

年頃の少女の艶めかしい肢体が露わになった。

「きつとずっとあなたを 探してた」

象牙色の頬を、雫が伝った。



もうやめてくれ。それ以上自分を傷つけるな。

思わず少女に近寄り、両肩に手を置いていた大きな漆黒の瞳から大粒の涙が流れ降ちる。

「ウォルジェンガ……さん？」

「ウォル、でいい」

曖昧な記憶の中、唯一鮮明に記憶は、母の声だった。「ウォル」と呼ぶ優しい声。

その名を呼んでほしかった。

涙にぬれた頬に手を伸ばす。初めて出会ったあの時のように。

「俺は過去を持たない。いったいどんな人生だったのか……少なくとも、安寧とした暮らしをしていなかったことくらいしか分からない」

ゆっくりと自分の服に手をかけた。床に服が落ちる。

上半身に刻まれた無数の傷を見て、少女が息を呑んだのが分かった。

「俺もお前と同じだ。とても平和な場所にいたとは思えない」

そのまま少女の背に手をまわして抱き寄せた。

素肌のふれあう感触が心地よかった。

「もし、記憶のない過去、お前と出会っているのだとしたら　もしかすると、同じ戦場で肩を並べていたのかもしれない」

腕の中の少女は震えていた。

「俺は俺のことをよく知らないし、お前はお前のことをよく知らない。もちろん、互いのこともだ。でも、これから……これから、知っていくことはできないか？」

きっかけは失われた過去かもしれない。愛しいと思うのは自分ではなく既に失くしてしまった心かもしれない。

しかし、今現実には、この少女が愛しいと感じている。この手を放したくないと思っている。

「もし記憶をなくす前にこの平和を望んでいたとしたら」

この少女と静かに、穏やかに暮らしたい。

もしそう願っていたとしたら？ 誰かは分からないが、その望みを叶えてくれたとしたら、少しくらいその恩恵に預かってもいいだろうか。

「もし失くした過去が辛いものなら思い出さなくてもいい。ただ、今生きてここにいる。それだけでいい」

抱きしめる腕に力を込めた。

少女の肩の震えがいつの間にか止まっていた。

「俺もずっと……お前を、待っていた」

会いたかった。ずっと、会いたかった。

「ウォル……」

熱に浮かされたような声で、歓喜が全身を駆け巡る。

涙にぬれた頬を拭うように指を滑らせた。

これまで女性に興味がないわけが良く分かった。

俺は、こいつだけを待っていた。

「グレイス」

軽い肢体はふわりと浮いた。

小さな両手が頬を包み込んでくれた。

そのまま漆黒の瞳が近づいてくる。

ずっと望んでいた少女を、ようやく手に入れた。

誓いは、果たされた。

## SECT・7 幸セナ生活

酒場の仕事はもう辞めるつもりでいた。業務が嫌なわけではなかったが、疲労度も激しく、このままではグレイスと過ごす時間が減ってしまうから　そんな女々しい事を考える自分はひどく新鮮だった。

どちらにしても一度ステラと話さねばならないだろう。

昼に街を歩くと、いつもと違う景色が見られる。

「ロータスさんじゃないか、珍しいね！」

酒屋の主人が声をかけてきた。卸売りの相手ということですのでに顔見知りで、この娘は自分の酒場の常連だった。

「うちの娘がいま体調を崩しててね、手が足りなくて大忙しだよ」

「大丈夫ですか？」

「ああ、毎晩飲み歩いてるからだよ。あ、いや、ロータスさんは悪くないんだよ。うちの娘が」

「……いえ、俺はもう店を辞めることにしました。これまでお世話になりました」

そう言つと、酒屋の主人は目をぱちくりとさせた。

「そうなのかい？　いったいどうして？　流行ってないなんてことないだろう？」

「いえ、少し……思うところありまして」

「さては特定の女でも出来たのか？」

凶星。

口を噤むと、主人はもう一度目を丸くした。

「ロータスさんを射止めるなんて大した娘だね。どこの誰だい？」  
少し躊躇った。

が、ぽつり、と零した。

「隣の家に住んでいた……」

「グレイスカ！　ああ、なるほど！　それなら納得だ」

主人はポン、と手を打った。

「ふはは、なるほどな。街一番の色男を射止めたのは街一番の美人か。うん、妥当なところだな」

街一番の美人かどうかはさて置き、あの少女グレイスが街の人々に愛されていたのはよく分かる。いつも笑顔を絶やさず素直な心で人と接しているのだから、よほどのことがない限り人に恨まれることはないだろう。

少女の温かい笑顔を思い出して微笑んだ。

「よく笑うようになったねえ、ロータスさん」

「……そうですか？」

「ああ。表情も明るくなったよ。いいことだ」

「ありがとうございます」

軽く頭を下げると、主人は少し表情を陰らせた。

「だが、少し気をつけた方がいい。ロータスさんのファンだって娘は多いから、グレイスが嫌がらせを受けることもあるかもしれない。逆もあるよ、グレイスを好きだったやつがお前さんに危害を加えるかもしれない……気を付けな」

主人の忠告を心に刻んで、ステラのもとに向かう。

昼間だから酒場は閉まっているが、階上<sup>うえ</sup>の宿はやっている。店の中を通らなくても横の階段が入口になっている。

二階の受付には、ステラが暇そうに一人座っていた。

「あら、ウォルジェンガ。どうしたの？」

「少し話がある。時間はあるか？」

「ええ、いいわよ」

不穏な空気を察したのか、ステラは不機嫌そうに頷いた。

立ち話をするわけにもいかず、二人で宿の一室に入る。奇しくも、あの晩に少女が眠っていた部屋だった。二階の角部屋。

あまり長く話したくはない。単刀直入に言った。

「俺はこの店を辞めようと思う」

「……え?!」

ステラの眉が跳ね上がった。もちろん予想していたことだ。

「何言ってるの? どういうこと?」

「言葉通りだ」

にべもなく切り捨てると、みるみるステラの機嫌が悪くなる。

「別の店長は俺の方で見つけてこよう。それまではきちんと務めを果たす」

「何故? 何か不満でもあるの? 売り上げはいいはずでしょう? 忙しいのならバイトを増やしましょう」

ステラが矢継ぎ早に質問する。

「もっと広い店舗を確保した方がいいの? それとも……」

「いや、もう夜には働かない」

「仕事がついのかしら? 宿の一つをあなたの宿泊専用にキープしましょうか?」

「違う。そんなことを望んでいるわけではない」

これ以上話すことはない。

部屋を出ようとすると、ステラが後ろから抱きついてきた。

「やめてくれ。何を言われても覆らない」

ぱつと振りほどくと、呆然となったステラが肩を震わせた。

「何故よ! 理由くらい言いなさいよ、ウォルジエンガ!」

すさまじい形相でにらみつけたステラは何か理由がないと引き下がらないだろう。

ひとつ、ため息をついた。

「……大切な人ができたからだ」

その瞬間セピア色の瞳が大きく見開かれた。

言葉を失ったステラをおいて、部屋を後にした。扉を閉めると、部屋の中で何かが壊れる音がした。

そのまま酒場の方に向かう。

ずいぶん自分に馴染んだ空気を吸い込んだ。ほんの数か月、春が終わって秋になるまでの短い期間だったがそれなりに楽しかった。

もし機会があるのなら今度は定食やでもやってみたい。リッドとグレイスがホールで働いてくれればいい。きっと繁盛するはずだ。この街のやさしい人々に包まれて。

そんなことを考えていると、表の扉が開いた。

「おはよう、店長！」

「早いなリッド」

そう言うリッドはいつもと同じように笑った。

子犬のように真ん丸な栗色の瞳を見て話を切り出した。

「リッド、話があるんだが……」

「ここ辞めるんでしょう？ 分かってるよ」

リッドは当たり前のように言った。

なぜ、と問う前に彼はえへへ、と笑う。

「グレイスのためでしょ。夜にこんなところで働いてたらほとんど一緒にいられないもんね」

「……」

何もかもお見通しというわけか。8つも年の違うこの少年にはどこか賢しいところがあるから。

「オレもすぐに辞めるよ。だってオレ、店長さんだからここで働いてたんだもん」

「リッド……」

「最初はさ、無表情で怖そうな人だなんて思ったけど、全然違ってたね。店長さんはすごく優しい人だったよ。周りの人を誰一人傷つけないように気を配ってたよ。鋭そうなのにちよつと抜けてるところもあったさ」

にこり、と笑ったリッドはなぜか少し寂しそうだった。

「グレイスを幸せにしてあげて。もう二度と離れないように」

「リッド、お前グレイスのこと……」

「言わないでよ。オレ、二人とも……大好きなんだから」

まるで泣きそうな顔をして笑う少年に、心の片隅で謝罪する。

この優しい心を持つ少年にもきつと幸せな未来が待っていますように　心の底からそう願った。

幸せだった。

とても、幸せだった。

愛する者が隣にいて、戦いのない穏やかな時の流れの中でただお互いを慈しみ合い、優しい人々に囲まれて。

グレイスと共に暮らすようになるのに時間はかからなかった。冬になる頃には、狭い自分の家で二人身を寄せ合って生活するようになっていた。

店とはとくに辞めていた。ステラがあの後何も言ってこなかったのが少し怖い気もしたが、自ら寝た子を起こすこともないだろう。飲み屋街には近づかないようにしていた。

完成したクラウドの剣術道場でいくらか剣を振ることもあった。リッドはずっとその道場に通い詰めていて、いつしか道場内の少年の中ではずば抜けた技を持つようになっていた。

そして、冬を越した春。

街の中央広場で、優しい人々に祝福されながら祝言を挙げた。

仕立て屋のマリーが心をこめて縫い上げた新婦のドレス。純白のレースに彩られたグレイスは、この世のものとは思えないほど美しかった。

大工のローストさんが急ごしらえで作ってくれた階段を、手を取

り合って上る。

壇上にいるのはクラウドとダイアナ。二人はすでに自分たちの親代わりだった。

「おめでとう、グレイス、ウォルジエンガ」

大粒の涙をぼろぼろとこぼしたダイアナがグレイスを抱く。

クラウドも珍しく翡翠<sup>ジェイト</sup>を潤ませていた。

「これからはずっと一緒だね、ウォル」

漆黒の瞳が見上げてくる。

「これからも、の間違いだ」

微笑み返して抱き上げた。

集まった観衆から割れるような拍手がもたらされる。

「愛している……グレイス」

「わたしもだよ、ウォル」

花びらが舞う春、自分たちは幸せの絶頂にいた。グレイスの中にはすでに新たな命が宿っていたし、新しく店を開くことも決まっていた。

当たり前前の幸せ。家庭を持ち、子を授かり、愛しい人と共に暮らす。

ただそれだけのことなのになぜこんなにも、泣きそうになるほどに嬉しいんだろう。

きつとそれは過去の自分が願い、求めて止まないものだったからだろう。それも、いくら手を伸ばしても届かない場所にあった。

その幸せがここにある。

この時自分は27歳、グレイスは21歳。

もう過去を振り返ることはなくなっていた。



## SECT・8 非日常ノ契機

穏やかに時が流れていった。

夏の暑さは心配していたほどでなく、身重のグレイスも未だ見ぬ子も元気なまま秋を迎えることができた。街唯一の女医のディーンにも順調だ、と太鼓判を押してもらい、見る見るうちに大きくなっていくグレイスの腹部を見て、生命の不思議を思い描いた。

店を閉めて家に戻ると、必ず妻が笑顔で迎えてくれる。最近購入したソファは、身重の彼女が休むにはちょうど良かったようだ。

隣に座ると、グレイスは見上げて微笑んだ。

「お帰り、ウォル」

すでに夜になると肌寒いくらいの季節になっていた。寄り添うようにして二人で一枚の毛布に包まれて、一日の報告をするのが常だった。

ディーンによると出産はもうすぐで、そろそろグレイスの体調に気をつけていて欲しいと念を押されている。だから店をほとんどリッドに任せて早めに家に帰ることにしていた。朝もぎりぎりまで残って家事をこなしていた。

そんな事をするリッドに迷惑だとグレイスが怒るのだが、彼女の無事には代えられない。もちろんリッドも了承済みだ。

「ねえウォル。名前、何にしようか」

「早いだろう。まだ男か女かも分かってないんだぞ」

そう言う彼女も肩にもたれて寄り添った。

「でも、すごく楽しみだね。どんな子かな。男の子だといいな。クラウドさんのところで剣術習わせるんだ。ウォルに似て、きっと綺麗な子だよ」

こういう恥ずかしい台詞を堂々と吐けるのはうらやましい限りだ。しかも、本気で心の底からそう思っているのだから言い返すこともできない。

そんな素直なところが本当に可愛いと思う。

「……お前に似たらきつと美人になるよ」

影響を受けて、照れながらもそんな台詞が言えるようになってしまった。

嬉しいような……複雑な気分だ。

それもすべて、幸せそうに笑うグレイスを見ているとどうでもいいことのように思えるのだった。

次の日はなぜか気になってしまつて昼過ぎには家に帰ることにした。リッドに店を頼み、家路を急ぐ。

途中でグレイスの好きな桃を買うのも忘れない。

そうして歩いていくと、家の前にグレイスとダイアナが立ち話をしているのが見えた。

「グレイス！ 体に障るからあまり外に出るなと言つてあつただろうー！」

思わず叫ぶと、彼女は肩をすくめるようにして笑つた。

「でもずつとうちの中にいたら気がおかしくなつちゃうよ」

「ふふ、生まれる前から過保護なお父さんね。今からこれじゃあ、生まれたらどうなるか……」

ダイアナの言葉には遠慮がない。

ほとんど自分たちの後見人と化しているクラウドとダイアナの二人にはいまだに逆らえなかった。

もう一人の後見人、クラウドもすぐに道場から出てきた。

「やあ、ウォル。仕事はどうしたんだい？」

稽古着だということは、今も生徒を見ていたんだろう。いまや街の多くの子供が通うようになった道場では、毎日入れ替わり立ち替わり道場生が稽古に来る。自分から見ても凄まじい腕を持つクラウドも常に稽古を欠かしていないようだった。

自分も早朝練習に付き合っていた。最初に言われたとおり、剣を

振っている間は至極落ち着いた。

にこにこと笑うクラウドは絶対に裏に黒い人格を隠し持っている気がする。

全く、意地の悪い質問だ。

「……リッドに任せてきた」

これは言いたくなかった。

「リッドにはすっかり負担かけちゃだめだって言ってるじゃん！」

こうやってグレイスが頬をふくらませて抗議するから。その姿は非常に可愛いのだが、あまり機嫌を損ねると厄介だ。

もう21歳、そろそろ母親になるというのにグレイスはまるで幼い少女のような心を持ったままだった。表情も仕草も言動も。見た目だけならだれもが絶賛する美女なのだが、どこか少女の雰囲気を残す愛らしい女性になっていた。

初めて会った時から変わらない。

これからもずっと、こんな穏やかな暮らしの中でこの笑顔を見ていられたらいい。

しかし、世界はそんなことを許してくれるはずもなかった。

「クラウドさん……！」

突然その場にリッドの緊張した声が入り込んできた。  
駆けてくる様子は尋常ではない。

「どうした？ リッド。店で何かあったのか？」

「店、じゃ、なくて……いま街全部が……」

「急がなくてもいい。何があったのかゆっくりと話してくれないか？」

クラウドの声にもどこか焦りが感じられる。

リッドはいくらか息を整えた後、こう告げた。

「セフィロト軍が……来てるんだ」

その瞬間、金髪的美丈夫がはたから見て分かるほど顔をこわばら

せた。いつも笑顔で何もかもを煙に巻くこの人らしからぬ表情。  
そんな顔を見たのは、これっきりだった。

突如現れたセフィロト軍は、半年前から施行した悪魔崇拜禁止令を盾にすべての家を探索し、悪魔崇拜の証拠を見つけては街の人々に危害を加えているらしい。

「今、ローストさんとリストさんが捕まった。オレは途中でこっちに來たから、まだ捕まる人は増えてるはずだ」

クラウドの決断は早かった。

「ウォルジェンガ、グレイス、二人はすぐ家に戻りなさい。ダイアナは二人についていてくれるかな。リッドは私と一緒に来てくれ」

「待て、俺も行く」

そう言ったが、クラウドはすでにいつもの笑顔に戻っていた。

「だめだよ、大切な人の傍を離れては」

そんなことを言われてはここを離れるわけにいかない。

リッドと二人駆けていく後姿を見送った。

道場の隣の家に入り、落ち着いてダイアナの淹れた紅茶を口にした。

悪魔崇拜禁止令が出された時からいつかはこんな日が訪れるだろうと思っていた。天使崇拜を強要するセフィロト国が元グリモワールの民を弾圧し始めるだろうことはよく言う予定調和的な出来事だ。少なくとも過去を持たない自分とグレイスはその片鱗を持つてはいなかったが、クラウドとダイアナは不安だった。

自分たちと共にいてもどこか気品漂う姿からグリモワールの追放貴族ではないかといわれている二人だ。また、天使の話が全く会話に出てこないことから未だ悪魔を崇拜していることは一目瞭然だった。

「この家にはないのか？ 悪魔信仰の証拠となるようなものは」

「ふふ、ちゃんと隠してあるわよ」

やはりあるにはあるんだな。後で隠し場所だけクラウドに聞くことにしよう。

そう思ってたため息をついた。

「クラウドもダイアナも……未だ悪魔信仰を捨てないのか？」

「そうね。信仰、というよりは身近で当たり前すぎて今さら遠ざかることなんてできないわ。きっと多くの人がそう思っているはずよ。確かにそうだろう。信条というものは昨日今日『やめる』と言われて変えられるようなものではない。

商売をするときは黄金を作り出すという悪魔ハアゲンティに、家族が病気になるれば癒しの悪魔ブエルに、困難が立ち塞がってどうしようもない時は魔界の王リユシフェルに祈る。

これまでの慣習はそう簡単に変えられない。

「……それによって国から弾圧を受けるとしてもか？」

「ええ。もちろんよ。だって私たちには魔界の王リユシフェルがついているわ。それに戦の悪魔マルコシアスも」

「そんなこと口に出すな。誰が聞いているか分かんぞ」

ため息交じりにそう言くと、ダイアナは微笑んだ。

「大丈夫よ、だって噂によるとゼデキヤ王の唯一の息子であるミユレク殿下は未だセフィロトの手に落ちてはいないのでしょ？ 皇太子殿下は聡明で情に厚い立派なお方よ。時間はかかってても、きっとまたグリモワール王国は再建するわ」

「……まるで皇太子を知っているような口ぶりだな」  
「ふふふ」

ダイアナは微笑んただけだったが、ほとんど肯定したようなものだ。

一般人にはあり得ない剣の腕を持つクラウドといい、いったいこの夫婦は何者なんだろう？

訝しげにダイアナを見下ろしていると、彼女は隣に座っていたグレイスを見て眉をひそめた。

「それよりグレイス、顔色が悪いわよ。大丈夫かしら？」

「う、うん。大丈夫……」

とても大丈夫には見えない様子で額に手を当て、何かをこらえているようだ。

「ちよっとお水もらってもいいかな」

そう言って立ち上がった瞬間、グレイスは床に崩れ落ちる。

「痛……っ」

「グレイス！」

全身からさつと血の気が引いたのが分かった。

慌てて支えてはみたものの、グレイスの呼吸は荒い。顔も真っ青でかなり苦しげなことがすぐに分かった。

「ウォルジェンガ！ 今すぐ街まで走ってディーンさんを連れてくるの。早く！」

「あ、ああ」

ダイアナの鋭い声に、すぐに家を飛び出した。

## SECT・9 囚ワレノ悪魔騎士

街へ続く土の道を駆ける。

あの様子だと、グレイスはいわゆる「産気づいた」というやつだろつ。

思った以上に動揺している。

街に近付くにつれ、白い甲冑に身を包んだ騎士たちがちらほらと見えた。

子供の鳴き声や大人の悲鳴、怒号……そんなものが飛び交っている。家に無理やり入り込み、かき回して些細な悪魔の痕跡も見逃さない。

ひどい光景だ。

今すぐにでも怒鳴り込んでやりたいところだが、今はそんな場合ではない。

周囲の喧騒から目を背けるようにして女医ディーンのもとへ向かった。

街の中はさらに多くの聖騎士たちで埋もれていた。見知った顔が縄につながれているのも見えた。

「おい、お前！　どこの家の者だ？」

純白の甲冑を纏った騎士に呼び止められる。

「後にしてくれ、急いでいるんだ」

そう言つと、鞘に入ったままの剣が飛んできた。

それを軽く後ろにステップして避けると、騎士は物騒な空気を纏った。

「逆らうな！　聖騎士団への反逆は、セフィロト国家、ひいてはネブカドネツアル王への反逆と見なされるぞ！」

今はそんな場合ではない。すぐそこに診療所があるというのに、今の怒号で他の聖騎士も集まり始めてしまった。

周囲の視線が集まっている。

「店長！」

遠くからリッドの声が聞こえた。

はっと見ると、茶髪の青年が駆けてくる。

「リッド、頼む！ グレイスが……すぐにディーンをクラウドの家に呼んでくれ！」

そう叫ぶと、リッドがはっとした顔をして、すぐにこくりと頷いた。

これでひとまず大丈夫だ。

自分もすぐに戻りたいのだが、周囲を取り囲んだ騎士たちはそれを許さないだろう。

「反抗的な目だ。気に食わんな」

最初に自分呼びとめた騎士がぐい、と鞘に入ったままの剣を胸のあたりに押しつける。今度はよけなかった。おそらく逆らわないことがここから逃れる一番の早道だと思ったからだ。

自分の周囲を取り囲んだ騎士は4名、下手に逆らえばそのまま取り押さえられてしまうだろう。

「待て、リーシエル」

その騎士の後ろから響いた声は凜とした女性のものだった。

そしてその場にいた4人の騎士は即時跪いた。どうやらこの女性はかなり高い位の騎士らしい。

そして、諫めた方の騎士は兜を取り去った。

ふわりと兜から零れ落ちたのはカールした赤茶の髪。

「やはりお前か……」

気の強そうな顔立ち、嵌め込まれたシルバーグレイの瞳は強い意志を秘めていた。

全く見覚えのない相手だ。

「こんな小さな街にわざわざ自ら出向いた意味があったな。情報は当たりだったようだ」

ふふ、と唇の端に笑みをたたえたその女性騎士はぱつと片手を上



げた。

「この者を捕えろ！ 命を奪うことなく我らが主に差し出すのだ！」  
その瞬間この場の空気が豹変した。

騎士たちは各々剣を抜き、こちらに突きつけたのだ。

「何だ……？」

困惑して立ち尽くす。

いったい自分は何をした？ 少し逆らっただけでこれほどの包囲は

……

「かかれっ！」

赤茶の髪の女性騎士が鋭く叫ぶと同時に、周囲の騎士が一斉に飛びかかってきた。

どうすることもできない。

グレイス……！

脳裏に浮かぶのは彼女の笑顔。

なす術もなく意識を失い、セフィロト軍に捕らえられてしまった。

気がつけば頑丈な鎖につながれ、全く身動きできない状態になっていた。轡もかまされていて声が出せない。

何とか上体を起こして壁にもたれかかる。

ここはどこだ？

見渡すと、なぜか見覚えのある景色だった。

古い棚に並ぶ酒の瓶。保存の効く根菜類や穀類が入った袋がいくつも並べられ、独特のカビの匂いが鼻をつく。

ああ、そうだ。ここは店の地下倉庫か。

ステラから雇われ店長を命じられて半年ほどやっていた酒場の地下にある倉庫だ。ここはしっかりした鍵も付いているし、捕らえた者を転がしておくには絶好の場所だろう。

ここに自分がいるということは、管理しているステラも捕まってしまったんだろうか？ すでに何ヶ月も会っていないとはいえ知らな

い仲ではない。無事でいることを願った。

全身が鈍く痛むのは捕らえられた時に負った傷のせいだろう。床にはいくらか血が零れており、背や後ろ手に縛られた腕は動く度に痛んだ。

ああ、あいつは無事だろうか。

思い出すのはあの黒髪の少女の姿だけ。

お腹の子も無事生を受けることができただろうか。

「グレイス……」

ぽつり、と喉の奥で呟いたとき、地下倉庫の鍵がガチャリと大きな音を立てて開かれた。

眩しい光が差し込んでくる。

逆光でよく見えないが、どうやらそこには男性と女性が一人ずつ立っている。

「確かに。よくやりました、フロリス」

「ありがとうございます、ケテル様」

恭しく礼をした女性はそのまま下がっていった。どうやらこちらは自分をとらえたあの女性騎士だったらしい。

では、残ったこちらの男は誰だ？

彼女はケテル、と呼んでいたが……

「ふふふ、この日が来るのを待ち望んでいましたよ！ まさかあの怪我で生きていたとは！ それものうのうとこんなところで暮らしているとは思いませんでしたよ！」

「?!」

誰だ、この男は?!

とにかく凄まじい殺気を感じた。が、残念ながら拘束された手足では動けない。

騎士ではないようだ、白を基調に青いラインの入った神官服を纏っている。同じく白く磨きあげられたブーツが床にあたってコツコツと音を立てている。顔は半分仮面で隠されていたが、それでもよ

く整った顔立ちが見てとれた。淡い茶髪は軽く波打っている。

その男は左手で仮面を抑えていた。

「やっと会えましたね、レメゲトン」

その動きはひどく不自然だった。健全な人間の動きではない。

何より、『レメゲトン』という言葉に一瞬心がかき乱された。失った過去の断片が疼いた。

「……？」

お前は誰だ、と聞こうとしたが喉の奥から呻きが漏れただけだった。

それを一瞥したケテルが左手を向けると、顔の横をものすごい速度の何かが通り過ぎて行った。頬に痛みが走り、何かが焦げる匂いがたちこめた。

「忘れたとは言わせませんよ。私の右腕を奪った悪魔」

ああ、そうか。この動きの不自然さはこの男が片腕であったがため引き起こされたものだったのか。だが、その腕を俺が奪ったとしても言うのか……？

記憶の欠片が警鐘を鳴らしている。

同時に、強い怒りが胸の内を焦がした。

「もう逃しませんよ、アレイスター・クロウリー。今は亡きグリモワールの天文学者にして無二の騎士とも呼ばれた悪魔の末裔、悪魔に愛されたとまで言わしめたレメゲトン！」

「?!」

アレイスター・クロウリー。その名に敏感に魂が反応した。

ごくり、と唾を飲む。

悪魔の末裔、『レメゲトン』、クロウリー、天文学者、騎士。

言葉の断片が記憶を刺激する　頭が痛い。

「その顔は忘れません。紫の瞳、長い黒髪は戦いの中で失くしたようです」

つかつかと歩み寄ってきたケテルという男は手にしたナイフでぴつと服を裂いた。

無数の傷が刻み込まれた上半身を見て、にやりと笑う。

「ふふ、この心臓の傷がその証」

左胸の傷にナイフを当てて、つう、と引いた。

赤い筋がそれに従って心臓の上、傷跡を縦断するように刻まれる。痛みにぴくりと体が震える。

「手も足も出ないようですね。貴方らしくもない」

この男は自分の過去を知っている　そう確信した。

見るからにセフィロトの要職に就いているこの男は、自分に腕を奪われたという。そして自分のことを『悪魔の末裔』と呼んだ。

「いったい、自分は何者なんだ。」

「このまま都へ連行しましょう。ようやく捕えたレメゲトン、公開処刑に値します」

不気味な笑みをたたえた目の前の男の焦点は合っていない。冷静な物言いをしているように見せかけてどこか狂っている。

ぞつとした。

このままでは本当にセフィロトの都に連行され、覚えてもいない過去に裁かれ処刑されてしまう。

聞こうとしたが、轡が邪魔で喉から呻きが漏れただけだった。

「そうそう、コクマがもう一人を連れに行きました。残念ですね、一網打尽というわけです」

もう一人……？

「彼女も生きていたんですね。嬉しいですよ、この手で復讐を遂げることができのですから」

その言葉にはつとめる。

目の前に浮かぶのは、強い意志を秘めた漆黒の瞳。

グレイスの全身に刻まれた傷は明らかに凄惨な過去を物語っていた。失った記憶は彼女と共に戦ったことを告げていた。

「見たところ悪魔のコインを失っているあなた達には抵抗する力などないでしょう」

彼女だけではない、今あの場にはまさに生を受けようとしている

子供たちが……！

全身の血が沸騰した。

その瞬間、胸の傷から光が放たれた。

## SECT・10 マルコシアス

目の前に、映像が浮かぶ。まるで上空から見下ろしているような感覚だ。

大地も大気もすべてが震えている。人々が大地を踏みならし、武器を鳴らし、打ち合いぶつかり合う音だ。ここは、戦場？よく見ると白と黒の旗印がある。セフィロト国とグリモワール国の戦いのだろう。

ふと地面が近づいていくと、その中にぽつかりと開かれた土の大地がある。どうやらそこは周囲を深い溝で囲まれているために兵から避けられたらしい。

その土の大地の中央に、真つ赤な血の海を作って誰か倒れている。それも一人だけではない。仰向けに倒れている黒髪の少女と、そこに覆いかぶさるように黒髪の男性が倒れている。

少女の顔には嫌というほど見覚えがあった。

グレイス

先ほどからずっとと思い描く妻の姿だった。

その姿は血に塗れ、明らかに命は途切れようとしているように見えた。寄ろうとしたがまったく体の感覚がない。

それよりむしろ……グレイスに覆いかぶさっている方は自分ではないのか？

その時、ぴくりとも動かない少女の額に黒い紋章が浮かんだ。

紋章は銀の光を溢れさせ、その光が徐々に形作っていく。

すると、その光につられるようにしてうつ伏せに倒れた男性の右手首に細いチェーンでくくられたコインが砕け散った。その欠片は降り出した雨に弾かれて鈍い光を反射した。

気がつけば折り重なるようにして倒れた二人の傍に、二人の天使が佇んでいた。いや、違う。あれは天使ではない。

「申し訳ありません 我が主<sup>マイ・ロード</sup> 希望を守ることにはなりませんでした」  
「マルコシアス 貴方のせいではありません」  
「ですが リュシフェル……！」

耳を疑った。

一人は褐色の肌に純白の二枚の翼を湛えた逞しい悪魔 戦の悪魔と呼ばれたマルコシアスだ。魔界では無類の剣士と呼ばれている、非常に人気の高い悪魔の一人だ。

そしてもう一人は 魔界の王、リュシフェル。6枚の翼を背に負い、緩やかな銀髪を風に流している。美術品のように整えられた美しい顔は憂いに満ちていた。

「世界は 崩壊するでしょう 私の力ももう幾許も持ちません」  
「リュシフェル」

「この二人を 巻き込んだことは 相違ありません せめて」  
リュシフェルは細く長い指を少女の額にのばした。

「そのような事をすれば この少女は 世界は」  
「いいのです 世界の為に 一人が犠牲になればなどとは 愚かしい考えでした」

「滅び行く悪魔達を どうなさるおつもりですか」  
「諭しましょう 共に 運命を受け入れよと」

リュシフェルの言葉に、マルコシアスはその場に跪く。  
主の手を取って甲に口付けた。

「我が君の 心のままに」

「ありがとう マルコシアス」  
リュシフェルは微笑んだ。

哀愁を帯びたその表情に釘付けになる。

「どうかこの少女が 再びすべてを忘れ 平穏と安堵のうちに 生きられるよう」

リュシフェルの指が再び少女の額に触れる。  
その指がゆつくりと紋章を描き出す。

マルコシアスも少女の上に重なった男性の体をふわり、と宙に浮

かせた。ぽたぽたと血が流れ出ているのは、心臓のあたりだ。

自分の胸に残る傷痕を思い出す。

「アレイ 少女と共に生きよ その血を顧みず 心の望むまま」  
ふわりと浮いた男性を見下ろすと、それは見紛う事なき自分の姿だった。

身を包む黒衣を深紅に染め、瞼は固く閉じられている。

その胸元、ちょうど血が湧き出している部分にマルコシアスの指がつきつけられる。

胸が熱い

左胸が焼けるように熱くなった。

「アレイ 我が息子 悪魔と人の間に生まれた 中立の者」

胸の熱さに導かれるように目の前の景色が薄れていく。

リュシフェルの荘厳な姿も、優しい瞳をしたマルコシアスの姿も

……

気がつけば、周囲の景色が一変していた。

目の前に純白の像がある。それは、魔界の王リュシフェルを象つたものだ。足元には真っ赤な絨毯が敷かれ、上を見上げれば大きなシャンデリア。

吹き抜けになった広い空間に、一人佇んでいた。

まるで貴族の屋敷の玄関ホールのような。

「ここは……」

「アレイ」

後ろから声がしてはっと振り返った。

そこに佇んでいたのは 伝承の通りの姿をした戦の悪魔マルコシアス。

背には純白の翼を2枚湛え、頭上には金冠を頂いている。鍛え上げられた肢体は褐色で、くすんだ紺の衣服に身を包んでいた。黒髪からは二本の角が飛び出しており、人間味を完全に取り払っている。



どこか少年のような容貌を残した不敵な表情は、笑うと八重歯が見え隠れする。

その姿に心臓が跳ね上がる。

「如何しても 辿り着いてしまふのだな 逃れられぬ結末に」

悲しそうな表情で笑う戦悪魔。

自分は声を失っていた。

しかし

何だろう、全身が沸き立つように叫んでいる。苦しくなるほどに全身が震えた。血が、呼んでいる。

グレイスと出会った時とは少し違う。あの時叫んでいたのは心だった。

でも、この悪魔を前にして歓喜に踊るのは体。そして、全身を駆け巡る血。

「再び契約を結ぶ事は 時を失う事と同義」

悪魔は淡々と言葉を紡ぐ。

「結ばねば処刑 結べば永劫 何れにせよ 選択を迫られている」

「マ、マルコシアス、ですか……？ 本物の？ 何の話をしているのですか……？」

「ふふ そうだ アレイスター 我が息子」

その言葉に混乱する。

目の前にいるのが本物のマルコシアスだとして、ここはどこだ？ 先ほどまでの戦場の景色は？ セフィロト国の軍はどこへ行った……？

「息子？ 俺が？」

「そうだ 最も血を濃く受け継いだ クロウリーの系譜 レティの子孫」

悪魔の瞳は片方が炎妖玉<sup>ガーネット</sup>、もう片方は碧光玉<sup>サファイア</sup>のオッドアイ。まるで宝石のようなその瞳から目を離せなかった。

「過去を知りたいか」

悪魔の問いは誘惑だった。

過去を知ることは、グレイスを受け入れた時に止めたはずだった。

過去を捨て、これから生きようと決めたはずだった。過去がなくても二人で生きていこうと誓ったはずだった。

それでも、一瞬心が揺れる。

「過去を知らねば 黄金獅子の末裔共々 セフィロトに処刑されよう」

処刑。

その言葉で思い出した。突然現れたあのセフィロト国の男が言った言葉。

グレイスも今危険な目に会っているんじゃないのか？

こんなところで迷っている場合ではない。

「マルコシアス、すぐに戻してください。俺はグレイスのところに行かなくてはならないんです」

「今戻れば 成す術なく ケテルに屠られよう 彼女に会うこともままならず」

その言葉に詰まった。

確かに、先ほどの状況を考えると、あの拘束を逃れる術はない。

セフィロト国の騎士に対抗する力も持っていない。戻ったところで自分には何もできないだろう。

だったらどうしたらいい？

「求め<sup>もぐ</sup>れば 我が力を授けよう 過去を知ることでもきよう ただし マルコシアスはふと目を細めた。

「さすれば 時が止まる」

「時が……止まる？」

思わず眉を寄せた。

「人間は年をとる 年をとって死に近づいていく 肉体が朽ち 魂が廻る だが 悪魔は違う」

「契約すれば、不老の体になるということですね」

「病や傷によらぬ限り 老いて死ぬ事もない」

「それなら望むところだ」

あいつの傍に、いつまでもいてやれる。

即答すると、マルコシアスは驚いた顔をした。まさかこんなにあつさり結論を出すと思わなかったのだろう。

が、永劫の時も不老もどちらでもよかった。

ただ、あの少女のもとに、傍にいたかった。

「戻れなくなるぞ アレイ 二度と 人の世には」

「世の中など関係ない。俺は、あいつさえいればいい。あいつを失ってしまったら」

そんな世界なんて、意味がない。

「迷いないな」

マルコシアスは微笑んだ。

「永劫を 恐れぬか 時の流れに取り残されようと」

「そんなものはどうでもいい。今、あいつの傍にすることが重要なんです。マルコシアス、契約すればあいつを守れますか……？」

そう言つと、マルコシアスは不敵な笑みをたたえた。

「お前次第だ アレイ」

褐色の肌の戦士は純白の翼を広げた。

その瞬間、自分の中にすさまじい情報が流れ込んできた。

## SECT・11 悪魔ノ一族

これはもしかすると、俗に「走馬灯」と呼ばれる奴だろうか。もう一度人生を体験しなおしているようだった。

それに従って自分の人格が戻っていく。記憶が復元していく。そうだ。思い出した。

彼女の名は

「ラック……」

喉から漏れた名は誰に届くこともなく拡散して消え入った。

物心ついた時には、すでに母と二人だった。

王都ユダの城下町、それも裏通りの小さな小さな家に身を寄せ合って暮らしていた。薄暗く陰気くさい、日の当たらない裏道。レンガ造りの建物がまるで空を埋め尽くすように聳え立っていた。

身売りをして自分を育ててくれた母。そしてもう一人、自分に「ウォルジエンガ」という名をくれた異国出身の老人。

その二人が自分の世界のすべてだった。

「ねえ、キイじい。悪魔の話、聞かせて！」

裏町の路地、日も当たらないような最奥で壁にもたれ、舗装もされていない土の地面に座り込んで。

名付け親の老人、キイじいにいつも話をせがんだ。

「仕方がないの」

元貿易商人だったが事業に失敗して国へ帰ることもできなくなってしまったキイじいは、昔取った杵柄で教養深く、知識が豊富だった。このグリモワールという国のこと。崇拜されている悪魔のこと。そして、キイじいが生まれ育った故郷の国に伝わる昔話。話が尽きることはなかった。

とても子を持つとは思えないほど美しい母と、キイじい。

これ以上の世界はいらないと思っていた。  
が、世界は時に優しく、時に残酷な事をするのだ。

母に手をひかれて初めて裏街を出た。

太陽がひどく眩しかったのを覚えている。そして、道幅の広さと人が多いことにも驚いた。

少し怖くなつて母の手をぎゅっと握つたまま俯いていた。

「さあ、ウォルジエンガ。これからあなたのお姉さんに会いに行くわよ」

「おねえ、さん？」

「ええ」

につこりと笑った母は、すでに治らぬ病を抱えていた。

手首はとても健康とは言えないほどに細く、足も折れそうに華奢だった。それでも、自分の手を握り返す力は強く、安心した。

母の病は自分が近くにいる限り進行し、最終的には死に至るということを知ったのはずっと後になってからだった。

裏街で育った自分は、ある日突然名門クロウリー公爵家に養子として引き取られた。そしていつしかアレイスター「クロウリー」と名乗るようになっていた。

病弱な母が亡くなった頃から、厳しい躰が始まった。貴族としての嗜みだという剣術、馬術、作法から舞踏に至るまで様々なことを叩き込まれた。

多くのことを学ぶのは楽しかった。新しく入り込んだ世界はあまりに広く、大きく、そして強かった。逆らうなどという言葉はまるでその世界には存在しないかのように。その上、最初は辛かった訓練もいつしか生活の一部と化していた。何より剣を振るのは単純に楽しかった。

何が何だかわからないうちに12歳になり、社交界にデビューした。

貴族の世界は、見たこともないほど明るく華やかだった。煌びやかなパーティでは父親であるクロウリー公爵に媚を売ろうという貴族たちがこぞって話しかけてくる。何もかも面倒だった。いきなり自分に突きつけられた世界はあまりに自分の意識からかけ離れすぎていたからだ。

クロウリー家は代々、悪魔のコインを守ってきた。契約の証であるコインを使つて悪魔を召喚し、その力を得る。そうしてグリモワール王家に貢献してきたのだ。

ファウスト公爵家と今は亡きグリフィス家と並び称される強大な力をもつ貴族だった。

そしてそのクロウリー家は悪魔の血を継ぐ一族。その噂を聞いたのは社交界に出てから、偶然小耳にはさんだものだった。

「父上、お伺いしたいことがあります」

「話なら 크리스に聞け。忙しいのだ、話しかけるな」

この家に来てからずっと冷たい父親は、使用人だった母に手を出し、そして捨てた。ところが世継ぎがいなくなると一転して自分をクロウリー家に引き入れた。

初めて見た時から、父親の存在は圧倒的だった。むしろ自分には正妻であるクロウリー公爵夫人との交流は全くない。唯一、姉に当たるダイアナ「クロウリー」とはしばしば話す程度だ。ほとんど執事の 크리스が自分の世話や教育をしていた。

すでに50歳を越した執事の 크리스は非常に有能だった。

そして、貴族の世界に放り込まれてすぐ母を亡くした少年に対し、情も深かった。

クロウリー家は悪魔の血をひく一族なのか、とそのものずばりの質問をぶつけると、クリスは悲しげに微笑んだ。

それは、とうとうこの時が来たか、と諦めている顔でもあった。  
「ぼっちゃま。昔話はご存知ですか？」

クリスはふとそう話を始めた。

「クロウリー家の源流は、伝説に残る女騎士レティシア・クロウリーに通じます。彼女が戦の悪魔マルコシアスを最初に使役したという事はご存知ですね」

「ああ、よく知っている」

悪魔学でも歴史でも、寓話の授業でも習うことだった。

「彼女は素晴らしい女騎士でした。生涯、その身を剣に捧げたのです。わずか20歳の時に炎妖玉騎士団の原型となる兵団を纏め上げ、それから、戦場での傷がもとで亡くなる31歳まで人間の夫を持つことはありませんでした」

「人間の？」

そこを強調したクリスに、この話の先を見る。

クリスにもそれが分かったらしい。淡々と告げた。

「もうお分かりでしょう。レティシア・クロウリーはマルコシアスと交わり、子を成したのです」

「……！」

「表向きは機密事項とされておりますが、この国では公然の秘密とされるほどに有名な話です。クロウリーは悪魔の血をひく一族。それがグリモワール国の重鎮と呼ばれる理由の一つでもあるのです」  
頭を殴られたような衝撃を受けた。

自分の中に、悪魔の血が……？

マルコシアスは好きだ。戦の悪魔とも呼ばれる彼が無類の剣の腕の持ち主であり、自分の祖父に当たる人物が過去に使役していたという事はよく知っていた。今もそのコインがこの屋敷に眠っているという事も。

グリモワールの一民として、一人の剣を学ぶものとしていつか会ってみたいと強烈に思う相手だ。

しかし、自分がその子孫であるとなると話は別だった。

「私は人間ではないのか？」

そう問うとクリスはじつと唇をひき結んだ。

その様子を胸の奥から熱いものがこみ上げた。

「もういい！」

そう叫ぶと、クリスに背を向けて自室に閉じこもっていた。

自分は当たり前前に人間だと思っていた。世界の人ほとんどそうであるように。

実はそうではないと気付いた時、世界は崩壊した。　　いつたい自分は何をしているんだろう？

優しかった母はいない。訳のわからない世界に放り込まれ、抵抗することさえ許されない。父親は自分に無関心だ。姉は正妻の子ということもあって、心から親しむことなどできなかった。

14歳になる頃には実家を離れることを決めていた。

もともと父の後を継いで政治家になる気はない。また、自分の中にマルコシアスの血が流れていると聞いてからは国家天文学者、つまりレメゲトンと呼ばれる存在に憧れることもなくなっていた。

15歳の時、家出同然で騎士団ガーネットに入団した。

試験ののち発表された所属先が炎妖玉騎士団だったのは何かの皮肉だろうか。

こうして自分はようやく実家を離れることができたのだ。



## SECT・12 ローシェーナ

騎士団での生活が始まった。

辺境の地カーバンクルに砦を構える炎妖玉騎士団では、基本的ガイネットに身の回りのことを自分でこなさねばならない。もちろん、貴族という身分は通用しない。それがたとえ、クロウリー家の嫡子であったとしても。

覚えるべきことは多かった。しかし、それらはすべて生活に必要なこと。

政治や経済、武道や歴史に関する知識がすでに豊富であった自分にとって、炊事洗濯の方法を学ぶのは新鮮だった。

特に、自分の身分を気にせず親しんでくれる仲間の存在は大きい。『ウオル』という愛称で呼ばれるようになるまで、そう時間はかからなかった。かつて母がそう呼んでいたように。

そんな仲間たちは、5歳でクロウリー家に引き取られてからほとんど外に出る機会のなかった自分をカーバンクルの街へと引きずり出し、貴族ではない一般の庶民たちの文化に触れさせ馴染ませていったのだった。

クロウリーの屋敷にいたころからは考えられないほど様々なものに触れた。

そうして徐々に忘れていった。

母を亡くした痛みも、父への畏怖も、悪魔の血も

騎士団にきて初めての冬がきた。多くはないが、それなりに雪の降る土地だ。内陸部であるため、特に朝晩は冷え込みが厳しい。それでも朝昼関係なく稽古を続け、同期の中でも一目置かれる剣の腕を磨いていった。

そんなある日、同じ年に入団し、最も仲の良かったシリウスと共

に街に出る機会があった

「お前は練習しすぎ！　ちつとは休めよ。俺たちがお前に追い付けなくなるだろ！」

などという理由で休日の街へと連れ出されたのだった。

昨晚振った雪がまだ残っている地面に、さくさくと足跡をつけながら二人並んで歩く。

シリウスはけて小柄ではなかったが、すでに大人と同じ身長だった自分と並ぶと、彼の視線は少し見下ろす位置にあった。南方出身のシリウスは浅黒い肌に目立つ金髪とオリーブ色の瞳を持つ15歳の少年だった。

寒いのは苦手らしく、襟部分に毛皮のついた暖かそうなコートに完全に首をうずめている。

オリーブ色の瞳を恨めしそうにこちらに向けて、シリウスは盛大に文句を言う。

「お前……寒くないのかよ！」

「寒くないと言ったら嘘になるだろうな」

自分が身につけているのは綿も入っていない薄手のコート一枚だが、シリウスのようにがたと震えるほど寒くもなかった。

しかしながらシリウスがあまりに寒い寒いというので、行きつけの定食屋で暖をとることになった。

店に入るとすぐ明るい少女の声がした。

「いらつしゃい！　って、なあんだ、シリウスとウォルじゃない」

「ういっす」

シリウスが片手をあげて応える。

淡い水色のエプロンドレスを身につけた茶髪の少女が肩をすくめていた。年は自分たちより2つほど上、この店の看板娘のローシェンナだ。

「どうしたの？　こんな時間に珍しい」

「今日は休暇なんだ。この間レメゲトンのリヴィングストーン卿が亡くなっただろう？ その葬送に出席するために団長から部隊長からみんな留守にしていたんだよ。それが帰ってきたから、今度はその間頑張ってた俺たちの休暇ってわけ！ シェンナ、なんかあったかいの頼むよ！」

「うちが冷たいものを客に出すような店だとも思ってるの？」

少女のあきれ声。腰に手をあててため息をついた少女は少しきつめな鳶色の瞳を歪めた。

温かい店内に入ってシリウスはようやくコートを脱いだ。

「あー寒かった」

「シリウスは無駄に寒がりよね」

「仕方ないだろう！ 俺はもつとあったかいことで生まれ育ったんだ！ こんな寒い所に来るとは思ってなかったんだよ！」

「何よ、カーバンクルを馬鹿にする気？」

「しっ、してねえよ！」

慌てて否定するシリウス。

その様子を見て肩をすくめたシェンナが自分の方を向いて微笑んだ。

「ウォルはどうする？」

「シリウスと同じものを頼む」

シリウスと並んでカウンター席に座ると、すぐに湯気の立つカップが目の前に置かれた。

「これは、あたしからの奢りよ。店の中でそんな寒そうな顔しないで。営業妨害だわ」

「ありがとう、シェンナ！」

シリウスは嬉しそうにカップを口に運んだ。

ほんのりと甘い香りがした。おそらくホットココアだろう。

昼時でもないのに店内が賑わっているのは、おそらく自分たちと同じように寒さに耐えかねた人々が逃げ込んだせいだろう。みな暖かそうな服に身を包み、湯気の立つ飲み物や食事を口に運んでいた。

窓の外では、雪が降り出しそんな分厚い雲が空を覆っている。今夜も寒くなりそうだ。

「何か見つけたの？ ウォル」

じつと窓の外を見つめていると、いつの間にかシェンナが真横まで来ていた。先が軽くウェーブした柔らかい茶色の髪が頬に触れそうな位置にある。もちろんわざとではないだろうが、長い睫がすぐ手の届くところにあつた。

普通の少年はこのくらい近くに少女の顔があれば避けるなり喜ぶなり反応するはずだが、全く自分の感情は動かなかった。

最近気づいたことだが、どうも自分は人より感情の起伏に乏しいらしい。

「いや、今夜もまた寒くなりそうだと思っていただけだ」

「こいつ、いつも深刻な顔してるけどほとんど何も考えてねーよ。人生について深刻に悩んでるような顔しやがって」

「本当よね。顔に似合わず、ってこういう人のことを言うのね」  
「……」

無表情も無愛想も生まれつきだ。今さらどうにかなるものでもない。

困って口を噤むと、シリウスがさらに笑った。

「この顔が困った顔だなんて、普通思うか？ どう見ても不機嫌100パーセントだよ！」

つられてシェンナもくすくすと笑う。

この二人が互いを気にし始めているのは、いかに鈍いと言われている自分にもすぐに分かった。それは、寮での部屋が同じで、シリウスと過ごす時間が長いせいもあるだろうが。

最近のシリウスの話題はシェンナの事ばかりだ。すでに話を聞き流す能力も手に入れていた。

そのシリウスは15歳の少年らしい満面の笑みを見せた。

「でもずいぶん柔らかくなったよな。この一年で！」

「そうね。最初は……本当に怖い人だと思ったもの」

「……そうか？」

首を傾げると、さらに二人が笑う。

しかし、その笑顔が好ましいものだと思っただけ、自分はこの一年で成長したのかもしれない。

その時、店の扉が乱暴に開かれた。

驚いた客の視線がそちらに集中する。

シエンナも声を失ったが、すぐ笑顔に戻った。

「いらっしやいませ！」

あわただしく入ってきた男はあからさまに不審だった。

外は雪だというのにひどい薄着で、全身が震えている。足元も裸足で、落ちくぼんだ目は光を失っていた。手足も細く、栄養状態が悪いことは一目で分かった。

シエンナは慌ててその男にタオルを渡しに行く。

その後姿を見送ったシリウスと目配せする。何があってもすぐ行動できるように、常に手元に置いている剣が足元に立てかけてあることを確かめ、背後の様子に全神経を集中した。

この不審な男に、周囲の客も注目している。

受け取ったタオルを全身に巻いてなお震える男は、何かに脅えるように辺りをきよるきよると見渡していた。もとは黒かったであろう髪は色褪せてぼさぼさ、同色の髭も方々にとんでいる。

ここ、カーンバングルの人間でないのは一目瞭然。

「大丈夫ですか？ どうぞ暖炉のそばに……」

シエンナがそう言うと、男はぎょろりとした目を彼女に向け、よろよろと暖炉に向かった。

その様子を見たシリウスがオリーブ色の瞳を細める。

「……シエンナに近寄んな、おっさん」

彼がぼそりと呟いた言葉に思わずため息する。

そう言う問題ではないだろう。

疑うべきは、あの男の素性だ。

どう鼻屑目に見ても東の都トロメオを経てカーバンクルにやってきた旅人ではなさそうだ。だからと言って北の街シリアから来たにしては薄着過ぎる。ここより南は人の住めるような土地ではない。

必然的に、やってきた方角は決定出来ようというもの。

そう結論付けた時、もう一度店の扉が乱暴に開かれた。

## SECT・13 シリウス

乱暴に開け放たれた店の扉から入ってきたのは、純白の甲冑に身を包んだ数名の騎士たち。

「セフィロト軍か?!」

シリウスの切迫した声を皮切りに、店の客は残らず悲鳴を上げた。騎士たちは、迷わず暖炉のそばに佇むみすばらしい男と隣のシェンナを包囲した。

騒然となる店内。

ところが、いち早く逃げ出そうとした客が、扉を出る前に吹っ飛ばされた。

「騒ぐな!」

その場を一瞬にして沈黙させるほどの威圧を持った声が鳴り響いた。

思わず自分とシリウスも剣に伸ばした手をぴくりと止める。

「騒がずば危害は加えない。我々はその男を捕獲しに來ただけだ」

騎士たちの指揮官と思われる男が進み出た。銀の兜を外して小脇あかに抱え、店内をぐるりと見渡した雄々しい顔立ちのその騎士は、赤錆色さびいろの髪をかきあげる。

その威圧は暗に逆らえば暴力も厭わないことを示していた。

ところが、隣のシリウスが鞘に入ったままの剣を手に一歩前に進み出た。

「待て。なぜセフィロト軍がこの土地にいる? ここはカーバンクル、グリモワール国領だ。許可なく侵入する事は例え聖騎士団でも許されないはずだ」

確かにその通りだった。

国境を越えて軍が侵入する、それは一歩間違えば戦争を引き起こす事態にもなりかねない危険な行為だ。だからこそ、この場にセフ

イロト軍がいるという事態があり得なかった。

何より、国境には関所があり、今も炎妖玉騎士団ガイネットが守っているはずだ。

「粹がるな、小僧」

「小僧じゃない！ 俺は炎妖玉騎士団員ガイネットのシリウス・イシス。返答次第によつてはグリモワール王家の名のもとにお前達を拘束する！」

シリウスが鞘に入れたままの剣を突き付けた。

が、赤錆ラスト髪の男は微動だにせず、騎士団の名にも反応しなかった。ただ、少し目を伏せては以下の騎士たちに命じた。

「逆らうならお前も捕縛する」

「?!」

シリウスが眉を寄せる。

そして、一瞬気を抜いた。

純白の甲冑に身を包んだ騎士たちがシリウスを抑え込み、床に伏せるまで数秒とかからなかった。

「シリウスっ！」

シェンナの悲鳴に近い叫びが響いた。

「……！」

自分は、目の前で起きた出来事に反応できなかった。

剣に伸ばした手もそのまま硬直している。

「その黒髪も炎妖玉騎士団員ガイネットだろう。同じく捕らえよ。その後、迅速にシーミウスを拘束せよ」

「?!」

身の危険を感じて思わず剣を手にした。

飛びかかってきた騎士を返り討ちに……と思ったが、一瞬 炎妖玉騎士団フアング団長の言葉がよみがえる。

セフィロトといざこざを起こしてはならない。なぜならそれは、相手に攻め入る機会を与えるのと同義だからだ。ゼデキヤ王が戦争を回避するため尽力なさる以上、自分たち騎士団員もその自覚を持



たねばならない。

どうしたらいい？！

迷いがそのまま結果に出た。

数秒後にはシリウスと同じように床に伏せっていた。

このままではあたりの様子が伺えない。

どうやらシエンナを挟んで、暖炉の前の男と騎士たち数名がにらみ合いを続けているだろうことだけが分かった。

あの男は何者だ。そして、なぜセフィロト軍が国境を越えてきた？ 騎士団はいったい何をしている？

「シーミウスを捕えよ！」

厳しい号令で頬に当たる床が大きく振動したが、すぐにそれは止まった。

「動くなっ！」

鋭い声が飛ぶ。

「セフィロト軍、及び罪人『シーミウス』、双方ともにグリモワール王家の名のもとにて拘束する！」

これは炎妖玉騎士団、ファング団長の声だ。  
ガイネット

どうやら騎士団の仲間たちが到着したらしい。やはりどうやらセフィロト軍は許可を得てグリモワールに侵入したわけではなかったらしい。

隙について自分を拘束していた騎士の首筋に踵を振り下ろす

鎧を纏っているとはいえ、継ぎ目の部分を無防備だ。

拘束を解いて立ち上がると、シリウスも同じように立ち上がったところだった。

すぐに辺りの様子を確認する。

自分とシリウスが倒した騎士が床に沈み、他の騎士は暖炉を取り巻いている。つい今しがた入ってきたと思われる炎妖玉騎士団ガイネットの面々が、各々の剣を白い甲冑の騎士たちに突きつけていた。

「『騎士殺しシーミウス』、罪人確保のための正当な侵入だ、ファ

ング「デibel卿。剣を退いてもらおう」

「できぬ。お主らが領権を侵害したことはまぎれもない事実。そして、そのシーミウスが我らが同胞の命を奪ったこともまた　消せぬ事実だ」

ファング騎士団長の言っていることが理解できなかった。

同胞の命を……奪った？　騎士殺し？

ところが、その言葉を噛み砕いて呑み込む前にその場が静まり返った。

「動くな」

どこかたどたどしい声が響く。

はっとして振り向くと、先ほどのみすばらしい男がシェンナの顔の両側に、包み込むように手のひらを向けていた。

シェンナの表情が強張っている。

いったい何をしたのか分からないが、シェンナの首筋には赤い線が入っていた。

「その子供、二人だけ残れ。後は、去れ」

「……！」

その場にいる全員が息をのんだ。

「おい、どーするよ」

後ろからシリウスの声がする。

シーミウスと呼ばれたみすばらしい恰好の男に、背中合わせに括られて、店の隅に転がされてしまった。ちらりと横目に暖炉の方を見ると、シェンナが椅子に座らされていた。

その顔は真っ青で、がたがたと震えているように見えた。

「先輩たちの足手まといにだけはなりたくなかったんだけど……」

隣国セフィロトから逃げ込んだシーミウスという男は、これまで幾人もの騎士たちを殺めてきた『あや騎士殺し』　彼は国境付近で捕らえられたものの、輸送中に逃げ出してグリモワール国内に侵入し

た、というのが事の粗筋だったらしい。

こうなってしまった今、自分たちにできることなどほとんどないが。

のんびりとした口調を装うシリウスも、内心では相当焦っているに違いない。何しろ、目の前でシェンナの命が危険にさらされているのだ。今すぐにも飛び出したい感情を抑えていることは顔を見なくても分かる。

「……シリウス、何か縄の切れそうな刃物はあるか？」

ぼそりと問うと、シリウスは小さく返した。

「いま、やってる」

言うまでもなかったか。

単純な剣技なら自分はシリウスに負けはしないだろう。しかし、幼いころからいたずらで策略を繰り返してきた彼は、小手先の技術では誰にも負けない。いつもどこから取り出すのか小道具を身につけており、様々な武器にも精通している。

騎士になるよりは密偵者スパイにでもなった方が能力を生かせるのではないかと常々思っていた。

縄に軽い震動が伝わる。

小さな鋸のこが何かで切断しているようだ。

暖炉の傍、シェンナの隣に佇むシーミウスはこちらを一瞥し、吐き捨てるように言った。

「まさかお前たちも騎士だったとは」

「だから何？ お前、騎士に恨みでもあるわけ？」

シリウスが挑発口調で問うと、シーミウスは鼻を鳴らして視線を外した。

答えるつもりはないようだ。

「……さっき見たところあいつの武器は細い金属線……色から見て銀線だと思う」

「……流石だな、シリウス」

シェンナを人質に取られ、心中穏やかではないだろうが、その中

でも敵の武器を見極めるだけの冷静さを残している。

「あいつの指の動きに気をつける、ウォル」

「何をひそひそと話している」

シーミウスの冷たい視線が降ってきた。

同時に頬に軽い痛みが走り、視界の隅で銀色の線が煌めいた。

よく観察すると、シーミウスの指先から銀の糸が何本か伸びているのが見える。

数メートルほどの飛距離がありそうだ。

「黙っている、子供ども<sup>ガキ</sup>」

ぎよろりと睨んだシーミウスは軽く手首を振って銀線を手元に引き寄せた。

あの手の動きさえ見ていればさほど怖い武器ではないだろう。

騎士たちが次々破れた背景にはおそらく武器を見破れなかったことが大きく関係しているだろう。

「縄が切れたらお前はシェーナを頼む、俺はあいつを……シリウス？」

声をかけてみて、背中越しの同僚の異変に気づいた。

息が荒く、手足が軽く痙攣を起こしている。

## SECT・14 悪魔ノ血

「……どうした？」

「わかんね……なんか……気持ち悪……っ」

シリウスの体が傾いた。

どさり、と床に倒れ伏すシリウス。

縄は切れていたようで、金髪が床にこぼれた。

「お前ら……いつの間に！」

シーミウスがこちらに気づいてぎろりと睨んだ。

距離を詰められる前に、先ほど没収された剣に手を伸ばす。

二本のうち一本をシリウスに投げ、自分はもう一本を抜き身で構えた。

が、明らかにシリウスの顔色が悪い。息も荒く、剣を杖にして立っているのがすぐに分かる。よるり、とよけた足元を見て、シーミウスはすぐに標的を決めたようだ。

「……シリウスっ！」

考えるより先に体が動いていた。

シリウスに両手を向けた犯罪者<sup>シーミウス</sup>に、躊躇なく刃を振り下ろす。

人に隙が出来る時は一体何時<sup>いつ</sup>か　それは、攻撃を仕掛けた瞬間だ。

「ぎゃあああ！」

すさまじい悲鳴をあげてシーミウスが仰け反る。

背中からぱつと鮮血が散った。

シリウスの鋭い声が飛ぶ。

「ウォルっ！」

シリウスに向けられた銀線<sup>ワイヤー</sup>は、かろうじて頭をかばった彼の両腕を微かに傷つけたにすぎなかった。その銀線が自分に進路を変えて飛んでくる。

が、一度見えてしまえばそれほど恐ろしい武器ではなかった。

「これで終いだ」

正確に剣で銀線を叩き落とし、返り血のついた剣を軽く拭って鞘に収めた。

シーミウスの背からはまるで噴水のように鮮血が湧き出している。

「ふ……ふはは……」

床に伏せた男から不気味な笑いが漏れる。

「業を背負え！ 罪を咀嚼し、苦悩に苛まれ、いつしか狂うがいい」

「……？」

理解できない言葉に、ただその場に立ち尽くした。

アエテルヌム

「永劫を聴け、騎士と言う名で被覆した罪に足掻け！」

どさりと床に崩れ落ちたシーミウス。

最後に呟いた言葉に、思わず背筋が凍った。

「V - I - T - A - E A - E - T - E - R - N - A - E ……幻<sup>フラ</sup>

想<sup>ウス</sup>に尽きよ E - Q - U - E - S …… D - E - V - O - T - I - O

…… D - E - V - O - T - I - O ……」

セフィロト国の古代語の意味など分からない。

ただ分かるのは、たった今自分は人間を殺したという事だけだ。

中の様子をうかがっていた騎士達が店内になだれ込んでくるのを、どこか遠くの世界の出来事のように見ていた。

その後、セフィロト国との間にいったいどんな話し合いがあったかは分からない。

自分がセフィロト国の罪人であるシーミウスを殺したのも事実。

ガイネット

そのシーミウスは国境突破にあたって炎妖玉騎士団員を十数名に及び殺傷したのも事実。

そして、セフィロト軍の行動はまごう事なき領権侵犯である。

すべてを総合し、どうやらすべてを帳消しにするという結果に落ち着いたようだ。

途中で気を失ってしまっていたシェーナは運良くシーミウスの殺害現場を目撃しなかった。

怪我もなく、すぐに回復して病床に伏せったシリウスの見舞いに来ていた。

「いったいどうしたのよ、シリウス。怪我はなかったんでしょ？」  
首を傾げるシェーナに、彼も肩をすくめて見せた。

「俺にもわかんね。なんか突然、気持ち悪くなって……ウォルは大丈夫だったのか？」

「ああ」

「不思議ね」

騎士団駐留所の敷地内にある病院の一室で談笑していると、そこにフアング騎士団長が現れた。背後には大きな体をしたフォルス部隊長を従えている。

「アレイスター」ウォルジェンガ「クロウリー、少し、話がある」  
騎士団長に呼び出されたのは初めてだった。

今回の事件で何か罰則が下るのだろうか。

そう思い、騎士団長について部屋を後にした。

通されたのは騎士団長の私室だった。

とはいえ、その造りは簡素なもので、装飾など皆無だ。武具が多く並んでいるのが目を引くくらいだ、騎士団長だからと言って特別豪華なものは見当たらない。

「さて、ウォルジェンガ。今回のことだが……特例的に罰則は無しとする」

フアング騎士団長の言葉に思わず眉を寄せた。

「『騎士殺しシーミウス』は騎士に対して異常なまでの妄執を持つ

ていた。それも、奇襲を得意とし、騎士を幾人も殺すだけの力も持っていた。あのセフィロト軍をなりふり構わずさせるほどには被害を出していたわけだ」

「……」

「君は今回セフィロト国から逃げ込んだ罪人を独断で裁いた。が、シーミウスは同時に炎妖玉騎士団員を幾人も殺傷した。つまりはこの国でも一級の犯罪者だ」

要するに、不手際と手柄で相殺。

そういうことだろう。

「それよりも、重要な事がある。これは……君が炎妖玉騎士団ガーネットに入団する際、君のお父上、つまりはクロウリー公爵から賜った事実だ」  
思わず息を呑む。

「君は、クロウリーの血筋について聞いたことはあるかな？」

「……っ?!」

ファング騎士団長の口から語られたのは、驚くべき事実だった。  
その話を聞きながら、思わず唇を噛みしめた。

完全に沈黙してしまった自分の肩をファング騎士団長がぽん、と叩いた。

「とりあえず部屋に戻りなさい」

「……はい」

部屋に戻り、ベッドにごろりと転がって天井を見つめていた。

同居人のシリウスがいない部屋はひどく広く、寒々しく感じた。

「悪魔の血……」

その存在は知っていた。執事のクリスがずいぶん昔に教えてくれたことだ。

が、重要なのは血を引くことではなかったのだ。

「毒……悪気……」



その血が、普通の人間に与える影響。

悪魔の血は人にいい影響を与えない。発せられる気を浴びた人間は、身体のみでなく精神まで浸食される。

もしそれが本当なら、シリウスは。

いや、それだけではない。

幼い頃に病死した母も

それは、自分と背中合わせに縛られていたシリウスがその体力を削がれ、今でも床に伏せるほどに。

「嘘だろう……！」

呟いた言葉に応えなどない。

それ以来、自分は再び人とかかわる事をやめた。相手に悪魔の血を警告する事は出来ないから、自ら人から離れていった。

まれに悪魔耐性を持つ者もあり、積極的にかかわってくることもあったが。

しかしながら、体調の回復したシリウスも、すべてを知るはずの騎士団長やフォルス部隊長も、自分を一人にしておくはずもなかった。

自分の中の血と、葛藤と。

皆とどこか素直に交われない自分を抱えたまま、いつしか数年が経っていた。

そして、運命の日がやってきた。

5年目にして部隊長に就任した自分のもとに、実家から初めて書簡が届いた。

「ファング騎士団長はすでに引退し、その跡を継いだフォルス」  
「バーディア卿が団長を務めているところだった。」

国家天文学者レメゲトンであつた自分の祖父が病床についたというものである。

ほとんど顔を合せた事もない祖父に何の感慨もなかったが、書簡にはさらに重要な事が示してあつた。

祖父の跡を継ぎ、レメゲトンの職に就け、という半ば命令口調の父親の言葉だつた。

## SECT・15 再契約

全く理解できなかった。

ここまで放っておいて、また拘束しようというのか。5歳の時に気まぐれのように自分と母を拾ったように

レメゲトンは国家天文学者、すなわち悪魔を召喚しその力を使役する特殊な職だった。クロウリー家は代々レメゲトンを輩出している名門で、祖父が亡くなれば彼が使役していた悪魔と代わりに契約する者が必要だった。

完全に拒絶した自分を諭したのは当時団長となったフォルスⅡバーディア卿だった。

豪快な彼は、何もかもを拒絶しようとした自分を諭し、こう言った。

「とにかく、ゼデキヤ王にお会いしろ。決めるのはそれからでも遅くないだろう?」

半ば無理やり王都に戻された。

そして、帰還した自分に待っていたのはゼデキヤ王との謁見だった。

第一印象は、本当に地味な人だ、という何とも失礼な感想だったが、しばらく話すうちにだんだんとこの王の魅力に気づいていった。情の深い懐。人を見る目の確かさ。そして、何より鋭い観察能力。

そのすべてがゼデキヤ王を王たらしめていた。

「君が望むなら、もしよければ」

ゼデキヤ王は優しい声音で、柔らかな笑みを湛えて言った。

「その才能をこの国のために使ってはくれないか?」

その時に、決めた。

騎士の道をあきらめてでも、このグリモワール国に尽くそうと。

レメゲトンに就任してすぐ、ロストコイン搜索の命令を受け、一人旅に出た。

一人は楽だった。

誰に触れることを気にする必要もない。何度も命の危険を伴ったが、そのたびに強くなっていった。それに伴って契約した戦の悪魔マルコシアスとのシンクロ率も急上昇していく。

戦闘レメゲトンとしては長であるねえさん……名門ファウスト家の長女メフィアⅡRⅡファウストと並ぶようになるほどだった。

そして、コイン搜索が始まってから3年目。

とうとう俺はあいつに出会った。

今は亡きグリフィス家の生き残り、ねえさんが国家には秘密裏に3年間大切に育て上げた少女ラックに

流れる悪魔の血が、あの少女の中に存在する魔界の王に強烈に惹かれた。一目見た時からどうしようもない感情が芽生えていた。

国家に存在を知られた少女はレメゲトンに就任し、ねえさんと共に片田舎から王都へ移り住んだ。

少女と出会い、自分はいろいろな感情を学んだと思う。

ずっと引つ掛かっていた実姉の存在。いつも見守ってくれていた炎妖玉騎士団の面々。ガーネット

少女と出会ったことで彼らのやさしさに気づかされた時、もう自分は少女なしで生きられないことを悟っていた。ラック

ところが、ほどなくして戦争が始まってしまった。

自分とねえさんは少女をおいて戦場へ来た。そして、天使を召喚

し戦うセフィロト軍を相手に死闘を繰り広げた。が、人数的に後れを取るレメゲトンは圧倒的に不利だった。

次々送り出される刺客に、グリモワール軍は徐々に追い詰められていった。

そして、とうとう半人前の少女も戦場へ駆り出される時がやってきた。

少女はその華奢な肢体と裏腹に、殺戮の悪魔グラシャ・ラボラス、炎の悪魔フラウロス、そして地震の悪魔アガレスという強力な悪魔たちと契約し、最前線でも勇敢にたたかった。

しかし、世界はそれほど優しくはなかった。

ねえさんが、死んだ。

育て親の死は少女に多大な絶望をもたらした。殺戮と滅びの悪魔の暴走。それによってもたらされた自軍への被害。

何とか暴走をおさめたものの、心に深い傷を負った少女はいったん戦場を離れていった。

ねえさんがいなくなり、少女が戦場を退いた今、あまりに乏しい戦力ではあったが、自分はもうかつてのように孤独に逃げることはしなかった。

フォルス団長はじめ、素晴らしい剣の腕を持つ者たちに助けを求め、その力を借りてセフィロト国軍と戦う算段を得た。

回復した少女も戦線に復帰し、幾人もの敵を倒した。

そして、グライアル平原で起こった決戦で。

敵方の長ケテル、死霊遣い<sup>ネクロマンサー</sup>ホドを倒した後のことだった。

自分はようやく少女と心を通じ合わせることができた。  
傍にいたいと心から願ひ、少女も同じように願ってくれた。  
ずっと欲していたぬくもりを腕に抱いていた。

が、その油断が最悪のシナリオを呼び寄せた。  
とどめを刺し損ねたケテルが自分と少女を剣で一つに貫いた。  
心臓の上に深い傷が刻まれ、おそらく少女も

ゆっくりと意識が浮上した。

辺りは真っ白で、霞がかったように何も見えない。その中にまるでふわふわと浮いているような感覚だった。

その白の中で、目の前にいたのは、褐色の肌の戦士だった。ずっとずっと自分と共に闘ってきた戦友であり、剣の師匠であり、そして。

「マルコシアス……あなたが俺の命を救ったのですね」

「我ではない 我が主 リュシフェルの意志だ」

マルコシアスは悲しげに微笑んだ。

「それでも 力を欲するか」

「もし、まだ俺に力を貸して頂けるといふのなら、俺は力が欲しい。あいつを守るために。」

出会ってからずっと守りたいと切望しているあいつの傍にいたい。めに。

「変わらぬな アレイ」

どこか懐かしい名だった。

その名は自分とクロウリーのつながりを、ひいては自分の中の悪魔を象徴するもの。

「その先に待つ 永劫をも 恐れぬか」

「……永遠の時があれば、あいつの傍を離れなくて済む。いついかなる時も傍にいてやることができる」

再契約をすれば、自分の中の時は停止する。今この瞬間、27歳のままで立ち止まってしまふということだ。いつかグレイス　ラックは自分の年を抜き、成長していくことだろう。おそらくは、まだ見ぬ子たちも。

その先の子孫たちの繁栄も見守っていくということだろう。

目の前にいる戦の悪魔マルコシアスがずっとそうしてきたように。「強くなった　アレイ　多くの悪魔が　お前を支持するほどに」

「……それは、『柱』と呼ばれるものですか？　世界の安定をもたらすという」

そう聞くと、マルコシアスは口を閉ざした。

「いつか　選択を迫られる　恐らく　あの末裔と共に」

「世界の安定というものには、あいつも関係があるのですか？」

「揺らぐな　アレイ　世界はまだ　潰えていない　希望は　様々に残っている」

「マルコシアス？」

どこか肝心な部分をはぐらかされてしまったような。

それでも、聞いて答えてくれる相手ではないことが分かっていたために口を噤んだ。

「末裔は逃げぬ　そしてお前もきつと　祈りのままに」  
ガイネット　サファイア  
炎妖玉と碧光玉のオッド・アイに吸い込まれそうになる。

この二つの色が混ざり合えば、自分の瞳の色になる。

「行け　我が息子　アレイ　人でも悪魔でもない　中立の者」  
マルコシアスの指が胸のあたりに触れた。

触れられた部分が熱くなる。

そうして、目の前の景色がかすんでいった。

ゆつくりと目を開けると、そこは地下倉庫。

目の前には白眼を血走らせたケテルの姿がある。右腕をグラシャ・ラボラスに奪われながらも、自分とくそガキを貫いたセフィラの長。

「今の光は……！」

驚いた顔をしたケテルを尻目に、全身に滾る加護を確認する。  
生身ではない肉体で拘束していた縄を引きちぎるのは簡単なこと  
だった。

上半身の服は先ほどケテルによって裂かれてしまった。そこから  
見え隠れする心臓の真上にある傷を覆うように、漆黒の悪魔紋章が  
輝いている。

「これ以上命を奪う事は許さんぞ、ケテル」

ねえさんだけに飽き足らず。

ラックにまで手を出すことは絶対に許さない！

「その紋章は……？ もしや、目覚めたのですか？！ 悪魔騎士ア  
レイスター！！クロウリー！」

「ああ……そうだな。本当ならこのまま夢の中で暮らしたかったん  
だが」

グレイス  
妻と共に。穏やかな時の中で。

「この代償は高くつくぞ、ケテル」



## SECT・16 加護印（前書き）

実は「LOST COIN」シリーズのアクセス数が、いつしか10万を突破していました……ありがとうございます！！

記念、と言っではなんです。が外伝的に誰かのストーリーを書こうと思います。

今のところライディーンか、敵国ではゲブラあたりを考えているのですが……もし要望あればメッセージや感想でどうぞ。

もし反応がなければ勝手に決めて勝手に書きます（笑）

実はこれからヨーロッパ旅行に出るので、たぶん帰ってきた3月終わり頃に書き始めると思いますが（遅っ！）。

それに伴って連載もいったんお休みします。（休んでばかりだな）

こんな拙い話ですが多くの人に読んでいただけて本当にうれしいです。

幕間が終わってから少しお休みをいただいて最初の方を推敲しようと思います。

そこから第二幕……ほんとにこの話完結まで書けるかな……（汗

ほんの少しでも感想いただけると非常に励みになります。これからも、よろしく願います。

0  
8  
・  
3  
・  
4  
早  
村  
友  
裕

左手に意識を集中すると、黒い霧のようなものが収束し、見る見るうちに剣の形をとった。

懐かしい感覚が全身を駆け巡る。

「だいぶ……鈍ったな」

体が重い。とんとん、と軽くステップしたが、あの戦争当時の身体能力や勘はそう簡単に取り戻せるものではない。どこか違和感の残る手足だったが、仕方がないだろう。

ずっと身分を隠し、自分とラックを見守っていてくれた義兄上に言われ、いくらか稽古していたのは正解だった。もしかすると、義兄上はこうなることすらも見越していたのだろうか。

目の前のケテルの背後に、数十枚の翼をまるで金冠のように広げた天使の姿がある。

とてもこの湿っぽい酒場の地下倉庫には似合わない壮麗な姿

王冠の天使メタトロン。天界の長であり、滅びの力を司る最強の天使でもある彼は、空気ではない別の媒体を使って声を響かせた。その不思議な声は頭の中に直接響いてくる。

「マルコシアス よもや こんな形で再会しようとは 思いもしませんでした」

すると、自分の背後にも褐色の肌をした戦士の姿が現れた。

黒髪から短い角が飛び出ており、また、頭上に金冠を頂いて背には純白の翼を一对湛えていることから、この悪魔が墮天であることは明白だ。

まるで少年のような風貌をしたこの墮天使は、笑みを見せた。唇の隙間から八重歯がのぞく。

「滅び行く世界と共に 貴方を失いたくはありませんでした」

「仕方あるまい これは 我が選んだ結果」

メタトロン  
リユシフェル  
天界の長でなく魔界の長を主に選び、マルコシアスは魔界へ下ったという。

堕天と成り、裏切りと呼ばれ。

「我は既に 天使ではない だが 悪魔にも 人間にも成れぬ 半端者 まさしく彼奴が 呼ぶように」

悪魔でも天使でも人間でもない、というフレーズには聞き覚えがある。あの殺戮と滅びの悪魔グラシャ・ラボラスがいつだったか吐いた台詞だ。

天使でも悪魔でもない、と言うのは分かるが、なぜマルコシアスはそこに「人間」という言葉を混ぜた？

自嘲気味に笑ったマルコシアスはふわりと純白の翼を広げた。

「我が息子に危害を加えることは 許さぬ 無論 主が創る この世界にも」

「刃向かおうというのですか」

「貴方が 退かぬなら 致し方ない」

「そうですね」

メタトロンの闘気が上昇した。

相変わらず……凄まじい威圧感だ。

この鈍りきつた体で勝てるか？

左手の剣を握りしめる。

「アレイ 気を張るな」

この堕天の悪魔は自分を息子、と呼んだ。

初代 炎妖玉騎士団長レティシア「クロウリー。自分の遠い先祖に当たるその人と交わり、その血を現世界に紛れ込ませた戦の悪魔「紋章契約は コインの契約とは 比較にならぬ 我がメタトロンの前で 現世界に存在できるほどに」

その言葉ではっとした。

堕天の悪魔は天使の前に存在できない その理を無視してマルコシアスがここにいる。紋章契約と言ったが、もしやそれはねえさんの腹部に刻まれたメフィストフェレスの印やくそガキの額に現れ

るリュシフェルの紋章と同じものだろうか。

それならばメフィストフェレスが墮天であるにも関わらず天使の前で存在を保っていた理由が納得できる。

「紋章契約　時を止める意味が　分かっているのですか」

メタトロンの声に焦りが混じった。

マルコシアスは苦しそうな声で答える。

「我は　失う事を　欲せぬ」

「私のような犠牲者を　出したくはなかった　だからこそ　早い段階で　世界の滅亡を願ったというのに」

天使や悪魔の会話は本当によく分からないことが多い。

最近ようやく片割れの概念を理解したというのに、世界の理と<sup>ルール</sup>呼ばれる規定はまだ多いらしい。

柱。自己犠牲。<sup>アエテルヌム</sup>永遠。世界の崩壊と創造、存続。

一つ一つは分かる単語のはずが、並べるとこれほど理解できない。

「ここで　滅しなさい」

「させぬ　人の心が　永遠を　望む限り」

「私に勝てるとでも　思っているのですか　以前の貴方ならともかく　今は」

「力が半減した今　天界では無理であろうな」

マルコシアスはそう言って不敵な笑みを見せた。

魔界屈指の剣士である彼は、特殊能力を持たないとされ、伝承によればリュシフェルやメフィストフェレス、ベルフェゴールのように最高位に位置するわけではない。ましてや、殺戮と滅びの悪魔と恐れられるグラシャ・ラボラスのような強大な力を持つ悪魔でもない。

それでも彼は故グリモワール王国において過去現在絶大な人気を誇っている。

「だが　現世界なら　器の差がある」

少年の容姿に似合わぬ不敵な笑み。

「行くぞ　アレイ　あの者が器であるうちは　勝機がある　印を見

定めよ」

「……はいっ！」

考えるのは後でいい。

今はただ目の前の敵に集中せねば。

懐かしいマルコシアスの加護を全身で感じながら、左手で剣を構えなおした。

「メタトロン様の加護を受けたこのケテルに楯つこうというのですか？　なんと愚かな！」

「退け、ケテル。これ以上俺の大切なものを手にかけてさせはしない」とりあえずこの狭い地下倉庫では満足に戦えはしないだろう。長剣を振るのも飛び上がるのも天井の高さを考えなくてはならない状態だ。

出口に立ちはだかるのは背後にメタトロンを従えた淡い茶髪のセフィラ、ケテル。

ねえさんの命を奪い、自分とくそガキを剣で一つに貫いた張本人。「光を避けよ　この剣で　光を弾く事は　叶わぬ」

右腕を失っているケテルは左手をこちらに向けた。

そこに力が集中するのを見とって攻撃のタイミングを計る。

敵と相対した時の独特な高揚感が全身を駆け巡っているのが分かる。いくら平和な生活に身を置いていても、所詮自分は戦人いくさびとなのかもしれない。

光の力を収束させた矢が飛んでくる瞬間に地を蹴った。

ケテルとの間合いを詰める。

右腕がないのだから隙を見つけるのは簡単だ。しかもケテルは武器を手に入っていない。

この狭い地下倉庫の空間内ならば、メタトロンはその力を十分に発揮することなどできないだろう。2年前の戦場で出会った時のように恐れる理由はない。飛んでくる攻撃にだけ気を付けていればそ

れほど苦戦する事はないはずだ　この男が、滅びの力をこの距離で使うのならば話は全く違ってくるが。

自分の背後で凄まじい音を立てて壁が破壊された。

ケテルの放った光球が炸裂したのだろう。

続いて放たれた第二波をよけて飛び上がる。

が、思ったより天井が低い！

体をひねって天井に着地、反動でケテルに奇襲をかけた。

「メタトロン！」

その途端、ケテルの周囲を光のヴェールが包んだ。

以前見たネツアクの能力と同じだ。

剣が弾かれ、そのまま壁に叩きつけられた。

息が止まりそうになるもすぐに地面にしっかりと立ち、剣を構えなおす。

マルコシアスの厳しい言葉が飛んだ。

「加護印を探せ　アレイ」

「はい」

観察能力が突出しているあいつならすぐに天使の加護印を見つけ出してしまっただろうか……そう思いながらケテルを観察する。

白い神官服はきつちりと着られていて、簡単には探せそうにない。戦場でねえさんに加護を奪われたコクマは左大腿部、ビナーは右肩にあった。どうやら何の関連もないらしい。

ただ分かるのは、右腕にはなかったのだという事だけだ。

ケテルの手の動きに注意しつつ間合いを詰める。

マルコシアスの加護で、ここ2年の空白期間ブランクがかなり緩和されている。ほぼ思い通りに自分の体を動かす事が出来た。

至近距離ならば光の矢は放てないはずだ。

そう思って再び間合いを詰めるべく地を蹴った。

SECT・17 呆気ナイ幕切れ

しかし、そう簡単にケテルが間合いを詰めさせてくれる訳もない。中距離で有効な目に見えぬ光の矢を駆使し、間合いを詰めさせまいと距離を置く。

だが、自分が最も実力を発揮できるのは近距離の戦闘だ。何としても距離を詰めねば……と思った時。

最も聞きたかった声が、しかし、最もこの場に現れて欲しくはなかった声が響いた。

「アレイさんっ！」

しかも、自分の名を呼んで。

アレイ それは、悪魔を使役するレメゲトンに与えられた名だ。剣を振り、手を血に染めた狂気の天文学者。なぜその名をグレイスが知っている？

驚いてその方向を見ると、強い漆黒の瞳がこちらを見返していた。そして、何かがまっすぐに飛んでくる。

これは……

手の中にあつた漆黒の剣が消失する。

その左手で、飛んできた物体を受け取った。

同時に右手をそれに添えて、横にスライドさせる。

「……ありがたい」

薄暗い店内でも、鈍く光を放つ刃が現れた。

軽く剣を振って、いったんケテルと距離をとった。いつの間にか背に生えていた純白の翼がばさりと大きな音をたてた。

名を呼ばれた一瞬以外視線はケテルから外さなかったのだが、あいつの声は小さくとも自分の耳にはつきりと届いた。

「……左」

左。

それが意図するところはすぐに分かった。



観察眼に優れたあいつなら、きっとすぐにケテルの加護印を見つけて出してしまうだろう。

その証拠にケテルの眉が跳ね上がり、突然の乱入者を睨みつけた。おそらくその眼には、自分の右腕を奪った悪魔を使役した黒髪のレメゲトンが映っていることだろう。強い漆黒の瞳を持つ、黄金獅子ゲーティア・グリフィスの末裔の少女。

「また貴方ですか、ラック・グリフィス！ 私の腕を奪った悪魔！」ケテルのけたたましい声が荒れた店内に響いた。

「余所見をするな、ケテル。お前の相手は俺だ」

この戦場いくさばでなお敵から目を逸らすケテルにそう警告してから、ふと自分の中のマルコシアスに尋ねる。

「マルコシアス、サブノックの加護は受けられますか？」

「印無き今 それは適かなわぬ だが 我の加護を与えよう」黒い霧が剣を包む。

加護を受けた長剣は、ようやくケテルの光の矢に対抗する力を得た。目に見えぬ速さで襲ってくる「光」を避けるのは容易ではない。ましてや、避けながらその中心に近付くなど、至難の業だ。

だが、それを剣で弾けるならば。

「戦争を引き起こし、さらに大敗したのは俺たちレメゲトンの罪だ」たとえそんな意図は全くなかったとしても。

おそらく滅びたグリモワール王国の貴族たちは、民衆はさぞ自分を恨んでいることだろう。そして、自分に命を絶たれたセフィロト国の兵士たち、その家族も自分の事を憎んでいるだろう。

そのすべてを背負って、それでも自分は生きるのか？ 戦うのか？

分からない

自分が生きる意味。マルコシアスが自分を生かした意味。紋章契約を説き、刻を止めることも厭わず守る理由。

一つだって分かりはしない。

「だからケテル。俺はここでもう一つ罪を重ねてやる」

それを知るために、もう少しだけ足掻く事は、許されないだろう

か？

魔界の王リュシフェル。グリモワール国亡き今、貴方に祈る事も問いかけることも許されないのでしょうか。それならば、俺は「俺は屈しない。セフィロト国の支配を認めない。今回のように、街を荒し、人を傷つけるのがお前たちのやり方なら、そんな支配は跳ね返してやる」

それは定められた道だったのかもしれない。

自分たちに平穏が与えられないのならば、

「何を言うのですか。もう滅びた王国に希望などない」

「完全に消えたわけではない。現実にマルコシアスはここにいる。魔界の創造主リュシフェルもまだ魔界に在る」

そして、義兄上と姉上の言葉からして、ミュレク殿下はおそらく生きてこの大陸のどこかにいらっしやるはずだ。

まだ、終わっていない。

もしこれから罪が償えるとしたら

「俺は、俺たちはまだ諦めるわけにはいかない」

「その願い 忘るるな 希望を捨つるな 未来は 潰えておらぬ」  
マルコシアスの声が全身に響き渡る。

醜く足掻いていいだろうか。諦め悪いと糾弾されようと、どれだけ自分が傷つこうとも。もう少しだけ、自分を息子と呼んでくれたこの悪魔を信じて、未来を信じてもいいだろうか。

「忘るるな 同じ望みを 持つ者がいる事を」

強い声が後押ししてくれる。

「マルコシアス、力を貸してください。俺は……あいつを倒して、新しい世界を拓く<sup>ひら</sup>」

「言わずとも」

声が響いて、全身に加護があふれる。

もう一度左手の剣を握り直し、ケテルにまっすぐ突きつけた。いつかの戦場でそうしたように。

「さあ、ケテル。決着をつけよう」

ほとんど頭の中にイメージが出来上がっていた。あのくそガキが『左』と言った瞬間から、もう勝利の確信しかできない。

右腕を失ったケテルが、印のある左腕を庇いながら十分な戦いなどできるはずもないだろう。

そして自分にはマルコシアスの加護がある。

光の矢は勘で叩き落とせばいい。

「行くぞ アレイ 一気に畳み込め」

「はいっ！」

返事と同時に地を蹴る。

迫ってきた自分に向かってケテルはいくつもの光球を放つ。

が、そのためには印のある左腕を自らターゲットの方へと差し向ければならない。

それを躊躇するケテルに勝機はない。

「うおおっ！」

気合いと共に光球を弾き飛ばした。

天井が一気に吹き飛んでしまったが、そんな事は後でどうにでもなる。

今、重要なのは……！

避けねばならなかった先ほどとは違う。狭い店内、ほとんどない敵との距離を詰めるのは簡単だった。

攻撃第二波が来る前に完全に間合いを詰める。

左手の剣を首筋に当て、右手でケテルの左手を抑え込んだ。

「なっ！」

大丈夫だ。メタトロンは恐ろしい力を持つが、その力が発揮できないのでは自分とマルコシアスの敵ではない。右腕がない今、左手さえ押さえてしまえば攻撃手段はない。

特殊能力を使わない、純粋な近接戦闘においては、セフィラとレメゲトンの誰にも負ける気がしない 唯一、レメゲトンだったグ

リフィス家の末裔を除いて。

一瞬だけ躊躇った。

それは本当に一瞬だったが。

抑え込んだケテルの左腕に、容赦なく剣を突き立てた。

その場を満たしていた光が消え失せていく。

ケテルの背からは何十枚もの翼で形作られていた金冠が消失し、左肩からは血が噴き出した。

「今度こそ、終わりだ」

剣を鞘におさめる音が響く。

そしてケテルは、声もなく仰向けに倒れた。

## SECT・18 再会ノ言葉

軽く息を整える。

やはり、大分体が鈍っている。

「精進せよ アレイ」

「……はい」

懐かしい台詞を残し、悪魔は魔界へと去っていった。

気がつかなかったが、戦っているうちにいつの間にか地下倉庫の天井を突き破って一回の酒場に上っていたようだった。もちろん天井も壁もぼろぼろで、とても簡単な修理で済むようなものではないだろう。

仕方がない、後でステラに謝るしかない。

ステラの気の強そうな瞳を思い出し、ようやく納得する。

彼女を見ると苛々する理由 それは、どこかねえさんとかぶっていたせいなんだろう。強く、揺ぎ無かったねえさん。彼女とどこかに似ている容姿は、その中身の違いを全面に押し出し、違和感と共に不快感が生まれた。

きつと、いつもステラを心から認めることのできなかった理由はそこにある。

「今度こそ、さらばだ。ケテル」

とうとう両腕を失ったセフィラに、同情は湧かなかった。

ねえさんの命を奪ったケテル ここで生かしておくのはおそろしく残酷な恩情だ。何しろ、加護を失ったセフィラの末路など知れているからだ。

それでも、そんな事に興味はない。

くるりと背を向けて店を後にした。

外に出ると、なんと店を取り囲むようにして十数名の騎士たちが

剣を構えていた。

その中心には黒髪の女性がぼんやりと佇んでいる。  
すぐに漆黒の瞳がこちらに気づいた。

何とも言い難い表情でこちらを見ている。

自然に声が出た。

「……遅かったな」

久しぶりに会ったというのに、なぜこんなにも気の利いた台詞が出てこないんだろう。

「くそガキ」

もう少し優しい言葉をかけてやりたいのに。このサブノックの剣を届けてくれた礼も言いたいはずなのに。

相変わらず、自分はこのくそガキ相手にはどうしようもなく不器用らしい。

くそガキはというと、ベージュのシンプルなワンピースの上からショートソードのベルトをくくり、それにいつもの剣を2本差しているという、如何ともしがたいファッションだった。

あれでは動きにくいことこの上ないだろう。

最初に自分を捕えるよう命令を出していた女性騎士が驚いたように叫ぶ。

「なっ！ 貴様……ケテル様は?!」

「知らん。もう既にケテルではない男なら店の中に転がしてあるがな」

ああ、思い出した。この女性騎士は、あのセフィロト国との戦争の時、開戦を告げた大使の一人だ。ケテルと手品師ゲブラと共にグリモワールへやってきた気の強そうな赤茶髪の女性騎士。

彼女と何人かの部下が店の中へ転がり込んでいった。

さて、この間にすべて片付けねばなるまい。

呆けたように突っ立っているグリフィスの末裔のもとに近寄り、そっと耳元に唇を寄せる。

「一度に片づける。リュシフェルを召喚しろ。全員の記憶を改ざんするぞ」

「……分かった」

こくりと頷いた彼女を見てほっとする。

やはり、こいつも

「ルシファア！」

「マルコシアス！」

鋭い声が重なって、周囲の騎士たちを眩い閃光が包みこんだ。

隣のくそガキの額には、黒々とした悪魔紋章が浮かび上がっている。

やはり、お前も時を失ったのだな

飛びだした光は徐々に収束し、形作っていく。

自分の頭上には戦の悪魔マルコシアスを。隣のくそガキの背後には 魔界の王、リュシフェルを。6枚の大きな翼を湛えた最高位の墮天使の美しい顔は、波打つ銀の髪に縁どられていた。完璧なまでに整ったその顔は憂いに満ち、その視線はまるでマルコシアスと悲しみを共有しようとしているように見えた。

褐色の肌の戦士は、その視線を受け止めてからグリフィス家の末裔に向かって微笑んだ。

「久しいな 幼き娘」

「……もう幼くなってるよ」

はにかむように笑った彼女は、それでもどこか少女の愛らしさを残している。初めて出会った時から、それだけは変わらない。

ところが、マルコシアスの微笑みを見たくそガキは少し首を傾げた。

「如何した 幼き娘」

「ううん、何でもない」

そう言つと、彼女はギュッと左手を握りしめた。

「ルシファア、お願い。力を貸して！」

「ルーク 貴方が望むままに」

突如現れた二人の墮天使に、周囲の騎士たちは一歩退いている。  
銀色のオーラを持つ魔界の王は大きく両腕を広げた。  
それにおののく騎士たちで、陣形が崩れる。

「すべての記憶を白紙に。このヒトたちが、この街に来たところから」

少女の眩きと共に、マルコシアスも同じく大きく腕を広げた。  
まず銀の光がリュシフェルから放たれた。

まるでそれを支えるかのように濃い紅の光がふわりと広がっていった。主に寄り添うように、ゆっくりと。

眩いまでのその光は、いつしか街中を包み込み、とどまることなく降り注いでいった。

どれだけの時間が流れたか知れない。

いつしか街を包む光は消え、自分たちに加護を与えていた悪魔の姿もなくなっていた。

目の前の景色はひどいものだ。

半壊した店、でこぼこになってしまった地面。花壇も巻き添えをくって散々たる有様を呈している。まるで、戦場で見た街のようだった。

悔しい。また自分たちがいる場所がこんな風に壊れていつてしまう事が。

いったい自分はどれだけ破壊を繰り返せばいいのだろう。戦う事が破壊につながってしまうのなら、甘んじてセフィロト国の支配を受け入れよというのだろうか。

もう、どうしたらいいのか分からない。自分は罪を犯し過ぎた。もしまだ希望があるのなら、グリモワール王国を再建しようと思った。だが、もしそれがまた破壊と殺戮につながるのなら、多くの人の悲しみを生んでしまうことなら、自分は強硬に推し進められるのだろうか？望まない人がいたとき、自分はそれでも未来を見据え



られるだろうか？

かつての自分が、平穩を望んだように  
葛藤で心が割れてしまいそうだった。

いつたい、どうしたらいいんだ。

導いてくれたねえさんは既にいない。ミュレク殿下はともかく、  
ゼデキヤ王がセフィロトの手に落ちている事は『ウォル』が知って  
いた。

自分に力はない。そんなこと、ずっと昔から知っている。  
いつたい、俺に何ができる……？

ところがその時、ふと左手に温かいものが触れた。

「……アレイさん、ですか？」

その声にはつと見下ろすと、俯いたままのガキが強く手を握りし  
めていた。

SECT・19 不安への旅路

目の前にいるこいつは本当に、『ラック・グリフィス』なんだろうか？

しかし、はつきりとアレイさん、と言った。それは 그레이スが知れない名前だ。その上自分に向かってサブノックの剣を放り、自身も両腰にショートソードを装備している。

何より、震えるような手が緊張を伝えている、

「普段敬語など使わんくせに、頭でも打ったかくそガキ」

「ガキって言うなっ！」

懐かしい台詞が帰ってきて、思わず微笑んでしまった。

「うわあ……どうしよう」

しかし、くそガキはそのまま俯いてしまった。

何とこかける言葉が見つからず、かといって手も振りほどけず、そのまましばらく佇んでしまった。

こいつはいったい誰なんだろうか。

그레이スなのか、ラックなのか、それとも 그레이シャー・ルシファ・グリフィスなのか。

まあ、誰でもいい。

「顔、あげる。くそガキ」

「……無理だよっ」

やたらと強固に抵抗したくそガキは、どうやら本当に嫌がっているようだ。

その様子にむっとした。

「いいから、こっちを見る」

「やだったらやだっ！」

お前はガキか！

いや、どこをどう見てもガキなんだが。  
仕方ないやつだな……。

とりあえず落ち着くまで、と思って抱き寄せた。支えた肩はやはり華奢で、今にも折れそうだった。なぜだろう。懐かしい感じがした。久しぶりに再会したような、不思議な感覚。

「だめー！ 恥ずかしくて死ぬっつー！」

ガキはそう言いながら胸元をどんどんと拳で叩き始めた。

恥ずかしい？

首を傾げておきながら、自分の中に残る記憶の残滓を確認する。

自分が　　というか、ウォルとして吐いてきた凄まじく恥ずかしい台詞の数々が頭の中にフラッシュバックする。どれだけ齒の浮くような台詞を言ってきた？！　このくそガキ相手に！！

今すぐに記憶を抹消して過去を書きかえたい。

ああもう……全く……！

「阿呆か、お前は」

「うええん……だつてさあ……」

「やめろ。俺だつて……」

恥ずかしいんだ、と言いかけてもう口を開けなかった。

口を噤んだ事を不審に思ったのか、くそガキもすぐ顔をあげる。

顔を逸らしたがもう遅い。

真っ赤な顔をしていたくそガキは、すぐに嬉しそうな顔に戻って

笑いだした。

「ふふ」

嬉しそうに笑ったくそガキは、そのまま自分の方に飛びついて来た。

そのまま背に手を回して抱きすくめられる。

今更、と思うのだがさらに心拍数が上昇する。

「大好きだ。アレいさんも、ウォルも……どっちも、好き」

そこへくそガキはとどめを刺した。

もう　　どうでもいい。

俺の負けだ。

あの恥ずかしい台詞も告白も全部お前にならなくてやる。

「……ずっと、会いたかった」

いつか言った台詞を繰り返して。

腕の中に戻ってきた温かな感触に酔いしれていた。

ほんの束の間、穏やかな暮らしをしていたのが一瞬で瓦解したように、これが刹那の夢だという事も分かっていたはずだった。

あの戦場で、自分はすでに人間とは相容れぬものになってしまっていたのだから。

悪魔の血を継ぎ、全身に傷を刻み、胸に刻印を穿<sup>う</sup>たれた。そして、この時はまだ気づかぬ枷をいつの間にか背負っていた。少女が受けた運命を共に抱くため、逃れ得ぬよう絡め取られていく。

それはハルファスが望み、マルコシアスが懸念した『世界の理<sup>ことわり</sup>』

不安と別離が近づいていると気づいてはいても、気づかぬふりをしたかった。

まだ、この腕の中の少女を抱いて、穏やかな時を感じたかった。

恥ずかしいからやめろと言ったのだが、くそガキは手を放そうとしなかった。

仕方なしにこのまま家路につく事にするが、日はずいぶん西に傾きかけていた。

「ねえ」

唐突に少女が口を開く。

「……何だ」

「あのね、子供ね、生まれたの。二人。双子だったの。男の子と、女の子」

どう答えていいか分からず、困惑した揚句口から出たのはそっけない言葉だった。

「……そうか」

「すっごい可愛いんだよ。帰ったらすぐ、抱いてあげて。おれ、ダイアナさんとクラウドさんに任せて放り出してきちゃったから……泣いてるかもしれない」

「お前、体は大丈夫なのか？」

「うん、平気。ルシファが治してくれたから」

静かに、穏やかに。少しずつ言葉を紡いでいった。

再会の歓喜に打ち震えながらこの先に待つ不安を押し隠し、ただ温かい左手だけを感じていた。

「アレいさんも、契約、したの？」

「……ああ」

そう答えてから、ケテルに裂かれてしまった服からのぞく心臓の真上の傷を撫でた。

すると、黒々としたマルコシアスとの契約の証しの紋章が一瞬だけ姿を見せる。

「お前も契約、したんだな」

「うん。もう……年、とらないんだって。ずっとこの姿のまま、生きてくんだって」

そうか、やはり、お前も。

ほっとする、と同時に胸が痛んだ。

「……やだね。子供が年取ってさ、死んじゃって、その子供が年取って死んじゃってもまだ生きてるんだって。マルコシアスさんと、同じだね」

自らの子孫を数百年の間ずっと見守ってきたマルコシアス。

それはいったいどんな気分なのだろう？

「怖いよ、アレいさん。そんな永い時を、いったいどうやって過ごしたらいいんだろう」

ずっと、ずっと楽しみにしていた子供たち。ようやく生を受けたというのに、セフィロト国の急襲によってその幸せは一瞬にして瓦解した。

「もしさあ、見守る事も許されなかったら、どうしよう……」  
育てる事を、見守る事を心待ちにしていたというのに。

「どうしよう……アレイさん」

セフィロト国に、自分たちの生存が知られてしまった。

それは、これから先の逃亡生活を意味していた。グリモワール国亡き今、自分たちの身を守るのは自分自身でしかない。何より、今回のように街中に被害が及ぶのならば、一か所に留まるなど言語道断。

もしセフィロト国の支配が続くのなら、自分たちは永久に逃げるか、どこか見つからない異国の地へ亡命するか……どちらかの選択肢しか残されていない。

いずれにせよ、そんな危険な逃亡に生を受けたばかりの子供たちを連れて行くわけにはいかないだろう。

子を思うからこそ余計に。

自分たちが為し得なかった平穏と安住をまだ見ぬ子らに託すのは、自分たちの我儘なんだろうか。

痛いほどに気持ち伝わってきて、胸を裂いた。

「……ラック」

俯いた彼女の肩をそつと抱いた。

「それは後にしよう。今はただ　それより先に」

ああ、苦しい。

何もしてやれないことが。

「会わせて欲しい。会ってみたいんだ」

見下ろすと、澄みきった漆黒の瞳がこちらを射抜いていた。

こんこん、と扉をノックすると、ものすごい勢いで扉が開いた。ぶつかりそうになつて慌てて飛び退つたくそガキを抱きとめると、扉から飛び出してきた女性がそのままくそガキに抱きついた。

「ラック！ ああよかった、無事だったのね！」

「ありがとう、ダイアナさん……クラウドさんも」

その後ろから姿を見せた金髪の美丈夫も、穏やかな笑みを湛えていた。

「やあ、久しぶりだね。アレイ」

この人には何もかも知られている。記憶をなくす前も、失くしている間も、そして今も自分の考えていることなどお見通しなんだろう。

「……久しぶりです、義兄上」

「相変わらず無愛想は治っていないようだね！」

「……久しぶりに会った義弟への台詞はそれですか」

はあ、とため息をつく、彼は肩をすくめて微笑んだ。

「褒めているんだよ？」

ああ、この人は変わらない。

きつと世界が終わる日でもこの微笑みで自分達を迎え入れてくれるんだろう。

「ただ今、戻りました」

そう言つと、思わず笑みがこぼれた。

無事な姿で再会できた幸せ。それだけで、いい。

「心配したのよ、アレイ。この街で見つけたという報告を受けてすぐ引越してきたんだから！」

「無茶は止めてください、姉上。姉上たちも見つかればただでは済まないはずだ」

ブラックルビー

なにしろ漆黒星騎士団長と、名門クロウリー家長女の夫婦だ。セ

フィロト国から懸賞金をかけられていないはずはない。

それでも姉上は大丈夫よ、と笑い自分たち二人を部屋の中へ導いた。

「静かにね。さっき眠ったところなのよ」

姉上はそう言いながら子供たちのいる部屋の扉をそつと開けた。

妻のグレイスは白い産着にくるまれた二つの命を抱いて、くるりと振り返った。

その顔は慈愛に満ちていた。少女の幼さは全くない、母の、微笑みだった。

「こっちがね、女の子なの。目の色が紫色でね、アレイさんと一緒だよ。きつと……美人さんになるよ」

そう言つて赤子を差し出した。

なんて小さいんだろう。

驚きと共に、恐る恐るその赤子を受け取った。

その赤子は驚くほど軽く、小さく、また弱々しかった。目も開いていない。顔は真っ赤で、真ん丸だ。そこに本当に小さな鼻と、口がぽつんとついているだけだ。

恐ろしいくらいにシンプルな生物だな。

「んで、こっちが男の子。まだ目を開けたところ、見てないんだけど……ほーら、ほっぺがぶにぶにだよ」

彼女はそう言いながら抱いた赤子の頬を指でつんつん、とつついた。

すると赤子はそれに反応するように小さく声を洩らしながら首を振った。

それを見た彼女はまた、優しく微笑む。小さな小さな命を抱いて。「へへ、可愛い。まだね、あんまり目は見えないらしいよ。でも、皮膚とか嗅覚とかはすげえ敏感なんだって。いっぱい触ってあげてよ！」



その様子を見て、自分の腕の中にいる赤子を見て。

何とも言えない優しさに包まれた。

不思議だ。この子供が、自分の血を継いで、グレイスに宿り、生まれてきた。

ただそれだけのことなのに、どうしてこの心はこんなにも歓喜を叫ぶのだろう。

「……グレイス」

「どしたの？ ウォル」

首を傾げてこちらを見る妻が、愛おしい。

そして、生まれたばかりの子も。

「……ありがとう。この子たちに会えて、よかった。本当に、ありがとう」

こんな台詞を言えるのは、きつとお前に会えたから。

この命に、出会えたから。

「へへ、頑張ったんだよ」

もしかすると、幼い記憶にしかない自分の母も、こんな風に優しい笑顔で子を抱いていたのかもしれない。クロウリー家に引き取られた時も、きつと自分の事を一番に考えてくれたに違いない。

それはそうだろう、薄暗い裏町で、明日の食糧にも困るような生活を選ぶくらいなら一度自分を捨てた相手でも子の衣食住を守るために頼ろうと思うのが親心だ。

どうしてだろう。それなのに、自分は、この家族一つ守ることだっただけ出来ない。

二人と子供と妻と。何より大切なはずなのにこの3人すら守る事が出来ない。

子を抱く妻の背に手を回して、大きく包み込んだ。

それでも嬉しそうな様子が胸に沁みた。

「……本当にすまない」

だれにも聞こえない声でそっと呟いた。

本当なら家族を守らなくてはいけないのに。傷つけようとする何

もかもから。

しかし、自分は近くにいるだけで周囲の人間に危険と不安と破壊をもたらしてしまうのだ。とても、子供の傍にいるわけにはいかなidろう。

いつだったか、まだ未熟だった末裔を王都に残して戦場へ行つた。その時、彼女は行かないで、と泣き喚いた。きつとこの子供たちだって物心ついていればそう言ったはずだ。でも、それでも

子供達をもう一度ベッドに戻してリビングに戻ると、姉上は温かい紅茶を用意して待っていてくれた。

席につき、温かいそのカップを口に運んでから、一つ深呼吸。

「義兄上、姉上……頼みたいことが、あります」  
思い切って、切り出した。

心臓が爆発しそうだ。いや、爆発する前に自責の念で切り刻まれて跡形もなく消えてしまえばいい。

自分は父親失格だ。

まだ生まれたばかりなのに。一度抱いただけの命なのに。今にも震えだしてしまいそうだった。

「大丈夫、分かっているよ」

ところが、次の言葉を紡ぐ前に義兄上がそう言って微笑んだ。はっとして顔をあげると、穏やかな夫婦は微笑んでいた。

記憶をなくしている間もずっとそうしてくれていたように。

「その言葉を口に出したら、君は、君たちは壊れてしまうかもしれない」

「貴方たちはとても頑張ったの。それは、私たちが誰より知っているわ。戦いなんて望んでいないことも、ずっと平穏を望んでいた事も」

「だから、すべて任せて欲しい。大丈夫、きっと立派に育ててみせるよ」

ああ、この人たちは本当に

「ありがとうございます……」

呆けたような言葉しか出なかった。

自分たちの事を分かってくれて、優しく見守ってくれて、一番助けの欲しい時に近くで救ってくれる。

自分は本当にいい人たちと出会えた。

「うっ……うっ……」

隣に座っていたグレイスから嗚咽が漏れる。

つられて涙がにじみそうになったが、じつと堪えた。

いつだったかレメゲトンに理解を示してくれた騎士団員に出会った時のように、自分たちを理解してくれる、それだけでも本当に温かい気持ちに包まれるという事を改めて思い知った。

## SECT・21 再び誓ウ

もし自分たちがコインを持たなかったらどうなっていただろう。平穏な暮らしの中で出逢い、穏やかな生活を享受できたのだろうか？ いや、そんな過程は無意味だ。

そもそもきつと悪魔達がいなければ、自分たち二人は出逢ってすらいなかっただろうから

長年の習慣と言うものは恐ろしい。

昨日あんなことがあったばかりだというのに、朝早くに目覚めてしまった。

仕方がないので日課となった剣の稽古をしよう、と外に出た時、ちようど同じように木刀を振っていた元 ブラックルビィ 漆黒星騎士団長と鉢合わせした。

「おはよう、アレイ。早いね」

「……おはようございます」

軽く礼をしてから、隣で稽古を始めた。

相変わらず美しい型を持つ義兄上の腕前は、あの頃から全く衰えを見せない。

「アレイ、少しだけ、話がある」

「何でしょうか？」

「……ファウスト女伯爵と、ミュレク殿下の事だ」

その名に、思わず手を止めた。

ひととおり稽古を終えて部屋に戻ると、ちようどくそガキも目を覚ましたところだった。

明るい灯が差し込む窓の外をぼんやりと見つめている。

その横顔はひどく美しかった。胸が締め付けられるほどに儚く、

憂いに満ちたその表情はもう少女のものとは言い難かった。一人の成熟した女性のそれは、目が離せなくなるほどに魅力的だった。

だから、声をかけるのを一瞬躊躇ってしまった。

「……ラック」

「なあに？」

振り向いた彼女は、いつもの表情に戻っていた。

どこか少女の幼さを残す明るい笑顔。光を灯した大きな漆黒の瞳。象牙色の頬を彩る黒髪。

きつと、初めて出会った時から変わらない。

「一度、カトランジエへ行かないか。そこに……ねえさんが、眠っているらしい」

「……え？」

少女は少し首を傾げた。

「あの時、戦争の混乱で遺体が王都まで辿り着かなかったらしい。義兄上が手を回して、カトランジエに埋葬してくださったそうだ。あの、森の中の、教会に」

少女の目が大きく見開かれるのを見た。

「今晚、発とう。長居すればそれだけ危険は増える」

きつとこれ以上子供の傍にいれば、もっと連れて行きたくなってしまう。

それだけは避けなければならない。あの子らの未来を願うなら。平穩を、あの双子に贈りたいのならば。

グレイス  
妻はきゅつと唇を噛んで、こう言った。

「名前、つけよう。二人に。それからさ、羽根の加護を置いていこう。あの二人に悪魔の加護があるように」

「……そうだな」

それ以上のものは残せないから。

いや、自分たちの痕跡を残してはいけないから。

「マルコシアスにしよう。名前」

少女の母親は唐突にそう言った。

「……男の方が」

「うん。マルコシアスさんみたいに強くて優しいヒトになれるように」

強くて優しい……？

優しいかどうかはさておき、聡明で真っ直ぐな、強い子に育つだろう。

「では、女の方は……ラステイミナ、という名にしていいたろうか」  
「ラステイミナ」

その名に、母がはっと目を見開いた。

「……いいだろうか」

もう一度聞くと、グレイスはにこりと微笑んだ。

「うん。そうしよう……きっと、とっても強い女の子になるよ」

この少女の育て親で、自分の導き手。

誰よりも気高く、美しく、そして強かったねえさん      メフィア

「ラステイミナ」ファウスト。

「大丈夫か」

「うん、平気……」

それでも青い顔をした彼女は胸に頭を預けてきた。

仕方がないだろう。この3日間、いろんなことがありすぎた。

本当なら今頃は子の誕生を祝って、微笑んでいるはずだったのだから

「少し休もう。カトランジェなら、いくらか心許せる」

「……うん」

小さな声で返答した彼女は、まだ幼い少女のように震えていた。

何故いつも自分は何も守る事が出来ないのだろう。

自分の生みの母も、目の前で光に貫かれたねえさんも、一度死に至ったこの妻も……いつだって、一つだって大切なものを守りきる  
ことなどできない。

もっと自分が強ければ。

もつと多くの事ができたならば。  
たくさんの命を守れただろうか。震える彼女に、別離の悲しみなど味あわせる事はなかったのだろうか

午後から街の人にお別れを言ってくる、と言って出ていったくそガキは、幾許もしないうちに逃げ帰って来た。

部屋に駆け戻ってばたん、と扉を閉める。

「どうした。真っ青だぞ」

「アレイさん……」

尋常でないその様子に、また何かこのくそガキを傷つける出来事が起きたのだと直感する。

「あのね、街のヒトね、誰もおれのこと覚えてないんだ……きっと、ルシファとマルコシアスさんがやったんだ」

「何？」

「マリー姉さんもローストさんも、『旅の人かい？』って。気をつけなっ……」

ああ、そうか。

マルコシアスとリュシフェルの光が街を包み込んだあの時、きっと自分たちの存在は街の人々の記憶から消え去った。おそらく、彼らも生まれたばかりの赤子の平穏を守るために。

「落ち着け。もしリュシフェルとマルコシアスのしたことなら、ただお前を狼狽させるためだけにしたわけじゃないだろう。よく考えてみる、その方が俺たちがこの街を去るのには好都合だ」

「……っっ！」

唇をかみしめたくそガキにも、その事は分かっているはずだった。それでもまた泣きそうな顔をした少女は、勢いよく自分の胸に飛び込んできた。

震える声で、震える肩で。

「……お願い。もう一回だけ、言って？」

「ラック？」

「お願い……」

何を、とは聞かなかった。

これまでずっと見てきた。こいつが何に苦しみ、何を失い、何を求めているのかは手に取るように分かっていたから。

震える少女を安心させるようにきつく、きつく抱きしめた。

「大丈夫。俺は、俺だけはお前の傍からいなくなったりしない。ずっとここにいます。忘れもしないし、死んだりもしない。隣にいて、一番に助けてやる。永久にお前と一緒にだ。もし、お前が嫌がったとしても……放さない」

もう何度も誓ってきた言葉だ。今さら口に出さずとも、ずっとそうしていくつもりだった。

それでも、お前がその言葉を望んでくれた、と喜んでしまうのは不謹慎だろうか。

いつも大切なものを失くしてぼろぼろに傷ついているお前が俺を求めてくれることを、何より嬉しく思ってしまうのは罪だろうか。

この先永劫の時を刻むことで、お前は何度も何度も傷ついてしまふんだろう。何度も別離を経験し、悩み、苦しみ、悲しみを抱いて生きていくんだろう。

でも、自分だけは絶対に傍にいてやる。

これまでの誓いをいっそう強く心に刻む。

戦場で一度死んだことで起きている自分たちの身体変化には気付いていなかった。この少女が過去をどんな風にとらえ、どんな枷を背負ってきたのか、まだ知らなかった。

マルコシアスが悲哀をこめて自身を『半端者』と言った理由を知っていれば、滅びの悪魔の名を呼ぶ度に滾る自分の中の血に気づいていれば、少しは予想できたかもしれないのに。



―― オワリ ――

夜を待つて出発した。

あの街の中で自分たちの記憶を残していた3人　義兄上と姉上、  
そしてリッド。

少ない見送りだった。

くそガキは、すでに小さくなってしまった影に向かってまだ手を  
振っている。

この暗闇では向こうからこちらの姿など見えないに違いない。

「……行くぞ、くそガキ」

「うん」

くるりと背を向けて歩き出した黄金獅子の末裔は、それでもまた  
一つ悲しみを乗り越えたように見えた。

夜明けは近い。明るくなる前に街から遠ざからねば。

ずいぶん歩いてから、また名残惜しそうに街を振り返ったくそガ  
キを見て、ぽつり、と呟いた。

「コインを……探そう」

「コインを？」

首を傾げたくそガキに、さらに淡々と説明する。

「この先何があるにしても、悪魔の助力が必要だと思う。無論マル  
コシアスとリュシフェルが不足だというわけではないが……」

「コイン探して、どうするの？」

「できる限り紋章契約をする。そしてコインは、破壊する」

「……いつになく過激だね、アレイさん」

楽しそうにくすくすと笑うくそガキ。

ああ、この笑顔はひどく懐かしい。

そう思ったら照れくさくて、気がつけば額をはたいていた。

「茶化すな。これはきつと最後のレメゲトンである俺たちに残された使命だ。コインの時代に終わりをもたらすことが必要だろう」

「なんで？」

「新しい時代が始まろうとしているからだ」

驚いて目を丸くしたくそガキに、さらに追い討ちをかける。

「ミュレク殿下を中心にグリモワール再興を願う人々が動き始めている」

「サンが?!」

サン「ミュレク」グリモワール殿下は、グリモワール王国最後の王ゲーディア「ゼデキヤ」グリモワールの唯一の息子にして元第一王位継承者であった人物だ。

彼が中心になって動くとなれば、様々な人物が動き出すだろう。

「もしお前が望むなら、多くの悪魔を集め、その支持を得、手助けする事も可能だ 数百年前お前の先祖がそうしたように、独立戦争には悪魔の力が必要だろう」

自分の先祖とマルコシアスと同じように。

何より、散らばったコインでまた不幸な運命をたどる人間がでることが許せなかった。その前に、破壊してしまえば何よりだ。

「うん……うん、そうだね！」

するとくそガキは、満面の笑みを見せた。

不覚にもその明るい笑顔にどきりとする。

「ミュレク殿下の居場所は義兄上に教えてもらった……行くか？」

「行く！」

ぱつと輝いた笑顔で、くそガキは手を差し出した。

「ね、急ごう！ アレイさん」

ところが、手に触れた瞬間、くそガキの体が美くんと飛び跳ねた。

「痛っ！」

「どうした」

「ん、何でも……ない」

くそガキ自身にも何が起きたか分かっていないようだった。

「それより、行こうよ」

「……本当に大丈夫か？」

「だいじょうぶだよ！」

そう言うてはいるものの、一抹の不安が駆け抜ける。

彼女の左腕は悪魔に授けられたものだから　殺戮と滅びの悪魔、

グラシヤ・ラボラス。

それでも、朝日の上り始めたグライアル平原は秋の穏やかな風に満ちていて。

ただ、隣に彼女がいる事が幸せで、未来への道が拓けたこと<sup>ひら</sup>で安堵<sup>あんど</sup>していて、他に気が回らなかった。

世界の理<sup>ことわり</sup>、柱、片割れの悪魔と光が別つ世界。

マルコシアスが自分に求めたものも、ハルファスが自分を推した理由も何も知らなかったのに。

すべてがつながった時に知ったのは、自分たちの前には残酷な選択肢が残されているという事だけだった

・ ・ ・ オワリ ・ ・ ・ (後書き)

ようやくこちらでも完結しました。

新しい冒険に出るのも一苦勞です。

でもこれでなんとかバッドエンドだけは避けることができました。  
— 安心です。

まだもうちょっと回収しなくちゃいけない伏線が残っているので、  
それは第二幕に持ち越したいと思います。

その前に第一幕の推敲をするので、書き始めるのはもう少し先になりそうです。

どこかで見かけたらまたよろしくお願いします。

続きというか番外というか、「STRAY GEMINI」という  
題で書いています。よろしかったらどうぞ。

ぶるぐもあります(作ったばかり) <http://d.hatena.ne.jp/lostcoin/>

10万ヒット記念はやっぱ手品師にしそうです。

いろいろ設定詰め込みすぎた大変な人なので。

きつとこのひと視点の話は気持ち悪いんだろーなー(汗  
完成はきつと4月入ってからになると思います。

それでは、ここまでお付き合いいただきありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4199d/>

---

FRAUD CALM -tail-

2010年10月8日14時04分発行